（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　宰主　上田啓之）

**任那のこと**

**はじめに**
　日本（やまと）の半島政策は、日本書紀（以下「紀」）では、所謂気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと；神功皇后）の三韓征伐に語られる新羅を通じて半島への進出を旨としてきた。

　辰韓・弁韓の時代から弁韓は辰韓と対立関係にあり、漢が半島に郡県制を導入して以降、倭人も弁韓諸国を通じて漢との交易に携わってきており、海上交易に秀でた駕洛（金海加羅）の協力を得ていたのであろう。倭人は列島の人々のみならず、半島にも早くから往来しており、新羅の建国に際しては、倭人の宰が馬韓と外交交渉に携わっており、後世の国境概念はみられなかった（[詳細](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#%E4%B8%89%E5%9B%BD%E5%8F%B2%E8%A8%98%E3%81%AA%E3%81%A9%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E5%80%AD%E4%BA%BA)）。

　楽浪郡は大陸との交易の中継点であり、帯方郡ができると海上のみならず、洛東江を溯り、竹嶺や鳥嶺（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を越え、漢江を下るルートも開通し、倭国も洛東江諸国（新羅を含む）とも関係を結びこれを利用した（三国史記新羅本紀阿達羅尼師今五年「158年」条に「竹嶺が開通し倭人が来聘す」、二十年「173年」条に「倭女王卑彌乎が使者を送り来聘す」とある「[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/15)」）。

　帯方郡を中心に公孫（こうそん）氏が強力になると、邪馬台国等にとっては魏との交易に障害となり、卑弥呼は帯方郡に派遣された魏の軍と結び、公孫氏の背後を絶つことに協力した（[半島に於ける対応](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#半島に於ける対応)）。その功により卑弥呼が親魏倭王に任じられたことにより、倭人は半島での交易に大いなる利を得たことであろう。新羅も洛東江方面、金海加羅に進出し、加羅から救援を求められ倭は新羅と対立関係に入った。また漢江流域に進出した百済も、南漢江流域で新羅とも対立関係となり、倭と協調関係を保ったのであろう。
　神功皇后三十九年（239年）条に、「【魏志に云はく、明帝の景初三年（239年）の六月、倭の女王、大夫難斗米等を遣はして、郡に詣りて、天子に詣（いた）らむことを求めて朝献す。太守鄧夏、吏を遣はして将（ゐ）て送りて京都（けいと）に詣らしむ】」とある。「紀」は国書であり中国でも読まれることを想定し、魏志倭人伝を無視することはできず、言及をしているが、神功皇后とは関係なく、政権とは無縁の倭の女王のとった行動という立場をとっていよう。魏志倭人伝では倭には旧（もと）百余国あり、使訳通ずる所三十国としており、当時女王は珍しくなく、その内の一人とした。天地開闢から天孫降臨以降万世一系とする政権である以上、それに反する政権の事蹟は、省かれるか傍流として言及されるに過ぎない。
　ところで、半島に関する記述は、複雑な構成となっており、復元が極めて困難となる。また、倭は列島内では所謂日本（やまと）国の意味と奈良の意味があり、半島からすれば対馬海流の向こう、大陸からすれば、半島南部と東海の向こうの人々、国で百余国からなる処とみていよう。

**神功皇后紀や応神天皇紀の半島に関する記述は干支二運後のもの**
　倭（やまと）政権の樹立は卑弥呼の時代の後のことであり、気長足姫尊の三韓征伐は干支二運（120年）後のものと思われ、仲哀（ちゅうあい）天皇九年（200年）は120年後の320年となる。新羅王は図籍（土地の図面と人民の籍）に封印（支配権の放棄）し、微叱己知波珍干岐（みしこちはとりかんき）を質としたとある。これを見て、高句麗王と百済王も倭（やまと）の西蕃となることを申し出、倭は半島に内官家屯倉（うちつみやけ）を定めたとしている（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)）。200年の三韓では馬韓・辰韓・弁韓が想定されていようが、320年では高句麗・百済・新羅となる。
　気長足姫尊の出兵は、神意による金銀の国（新羅）の取得として描かれているが、半島の鉄と製鉄の技術を取り込むことが主眼であった。鉄は交易の決済（貨幣代用）として重要であった。この親征にあっては、軍事においては武内宿禰（たけしうちのすくね）や吉備の系統が、海運にあっては安曇（あずみ）の系統、外交においては和邇の系統が中核となった。仁徳天皇五十三年（365年、[書紀巻11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki27.htm#五十三年)）条には、新羅が朝貢（みつきたてまつ）らないため、上毛野君（かみつけのきみ）の祖、竹葉瀬（たかはせ）に精鋭の兵を与え新羅に派遣し、新羅が迎撃し膠着したが、協力者があり右翼が強固で左翼を攻めるよう助言があり撃ち破ることができ、四邑の民を連れ帰ったとしている。ただ、金富軾（きんふしょく）の三国史記新羅気本紀では、倭兵の来寇はあるが、すべて撃退したとしている。
　訖解尼師今（きっかいにしきん）三年（312年）条に「倭国王、使を遣はし子の為に、婚を求む、以て阿湌の急利の女（むすめ）を送る（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/20)）」、同三十七年（346年）条に、「倭兵･･･金城を包囲し急攻す･･･王門を閉じ出ず。賊食尽き将（まさ）に退かむとす。康世（こうせい）に命じ勁（精鋭）騎を率い追撃し、走（にげ）せしむ（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/20)）」とある。奈勿尼師今（なもつにしきん）九年（364年）条に、「倭兵大きに至る。王、之を聞きて、恐れ敵とすべからず。 草の偶人數千を造り、衣を衣せ兵（器）を持たせ、吐含山の下に列べ立てる。勇士一千を斧峴（ふけん）の東の原に伏せる。倭人、衆を恃みて直進す。伏せ發（弓をはな）ち其の不意を撃つ。倭人、大きに敗走し、追撃して之を殺し幾（ほと）んど盡きぬ（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/20)）」とある。

　半島北方では魏の毌丘倹（かんきゅうけん）により故地に追いやられた高句麗が、美川王（びせんおう；在位300年－331年）の時に楽浪郡から帯方郡に攻め込む勢いを取り戻し、百済と新羅は高句麗の南下を恐れ、相互に使者を派遣し連携を模索していた。その脅威のなか、高句麗は故国原王（ここくげんおう；在位331年-371年）の時に、慕容（ぼよう）氏（前燕）に攻め込まれ燕に臣従する状態となり、その三十九年（369年）に百済を攻めるが破れ、逆に371年に百済の近肖古王（きんしょうこおう）に平壌にまで攻め込まれ、故国原王は亡くなっている。
　近肖古王は372年には東晋に朝貢し、鎮東将軍・領[楽浪郡](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A5%BD%E6%B5%AA%E9%83%A1)太守に任じられている。近肖古王が「鎮東将軍領楽浪太守」に除せられたのは、遼西から馬韓に至る地域を支配したことを東晋が認めて除授したものである。百済がこれほどの軍事力を発揮しているのは異例であり、倭国に七支刀を贈ったことからすれば、倭軍が何らかの形で百済軍を支援していたとすべきであろう。
　気長足姫尊（神功皇后）四十九年（249＋120＝369年）条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)）に、将軍荒田別（あらたわけ、上毛野君祖）等が百済の将軍木羅斤資（もくらこんし）等と共に新羅を討ち、「比自㶱（ひしほ）、南加羅（ありひしのから）、喙国（とくのくに）、安羅（あら）、多羅（たら）、卓淳（とくじゆん）、加羅（から）七（なな）つの国を平定（ことむ）く。仍（よ）りて兵を移して、西（にしのかた）に廻（めぐ）りて古奚津（こけいのつ）に至り、南蛮（ありひしのからくに）の忱弥多礼（とむたれ）を屠（ほふりさ）き、百済に賜ふ。・・・時に比利（ひり）、辟中（へちう）、布弥支（ほむき）、半古（はんこ）、四（よつ）の邑（むら）、自然（おのづから）に降服（したが）ひぬ（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）」とあり、倭軍が百済の東部と南部を安定することで、高句麗を平壌まで追撃することが出来たのかもしれない。この百済の急激な軍事的膨張は長く維持することが出来なかった。百済に政変があり、倭軍との連携が機能しなくなったのであろう。
　「紀」によれば、百済では神功皇后五十五年（255＋120＝375年、[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#六十五年)）に百済枕流（ちんりゅう）王が亡くなり、王子阿花（あくゑ）が年少で叔父の辰斯（しんし）が王位を奪ったとある。三国史記百済本紀では、そのような政変はなく政権が継承されたとしている。「辰斯王、近仇首（きんきゅうしゅ）王の仲子（次男）、枕流の弟、人と爲りは、強勇、聰惠にして、智略多し。枕流の薨（こう）なり。太子少（わか）し、故に叔父、辰斯、即位す。[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/124)）」とある。また、「阿莘（あしん）王、或ひと阿芳と云く、枕流王の元子。初め漢城別宮に生るに、神光、夜を炤（てら）し、壯に及びて志氣、豪邁（豪勇英邁）、鷹馬（鷹狩り騎馬）を好む。王薨りし時、年少く、故に叔父、辰斯位を繼ぐ。（辰斯）八年に薨り、（阿莘）即位す。[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/125)）」とある。高句麗はこの乱れをみて攻め込んだと思われる。
　百済本紀辰斯王八年（392年）条には、「秋七月に高句麗王、談德（だんとく；広開土王）、兵四萬を帥ゐて、來り北鄙を攻む。石峴（せきけん）等十餘城を陷れる。王、談德能く用兵すを聞く。出でて拒むことを得ず、漢水の北諸部落多く沒す。冬十月、高句麗、關彌（かんぴ）城を攻め拔く。王、狗原（くげん）に田（田猟）し、旬（十日）經て返らず。十一月、狗原行宮にて薨（みまか）る（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/125)）」とある。
　応神天皇三年（272＋120＝392年）条（[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#三年冬十月（かむなづき）辛未)）では、百済の辰斯王が天皇に対する礼を失し、紀角宿禰（きのつのすくね）・羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）・石川宿禰（いしかはのすくね）・木菟宿禰（つくのすくね）が派遣され、百済は詰問され辰斯王を殺し、紀角宿禰等は阿花（阿莘）を王としたとある。「礼を失し」とあるのみであるが、国内を乱し高句麗に干渉を許したこととなろうか。辰斯王が田猟に際し亡くなられたか、問責されて国人に殺されたか記述は異なるが、百済と新羅は高句麗と倭との間で揺れていたことが窺える。
　百済本紀阿莘王六年（397年）に、「王は倭国と好を結び、以て太子、腆支（てんし）を質と爲す」とあり、応神天皇八年（277+120＝397年）条では、百済記を引用して、「（百済は高句麗により）枕弥多礼（とむたれ）、及び峴南（けんなむ）、支侵（ししむ）、谷那（こくな）、東韓（とうかん）の地を奪はれぬ。是を以て、王子直支（とき）を天朝に遣して、先王の好（よしみ）を脩む」とあり、腆支（直支）が質となっている（百済東部、南部、済州島に及ぶとあるが、広開土王四年（395年）には、百済を浿水（ばいすい；大同江）のほとりで破り八千人を捕虜としたとあるのみで、それ以南には言及はなく、三国史記では裏付けることは出来ない）。新羅についても、実聖尼師今（じっせいにしきん）元年（402年）条に、「倭国と好を通じ、奈勿王の子、未斯欣を質と為す」とある。
　「紀」と三国史記とでは記述が異なり人により解釈が異なる。神功皇后紀や応神天皇紀の半島に関する記述が干支二運(120年)溯って編入されていることは了解いただけよう。

　「紀」では「一書」、「一云」としてどんでん返しのような記述が後に組み込まれることがある。仲哀天皇九年（200年）十二月条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#十二月（しはす）戊戌)）に、新羅王の宇流助富利智干（うるそほりちか）を臣従させたとする記述がある。これは三国史記と照合が可能であり、卑弥呼（170頃-248年）、あるいは台与の時に起こっていたことになる。
　「紀」の記述では新羅王が臣従し内官家（うちつみやけ）となった、あるいは新羅王を殺したともする。王の妻が新羅の宰となった倭人に妻となると誘い王の屍を取り戻しこの宰を殺した。このことで倭王が軍を差し向け、恐れた新羅の国人が王の妻を殺して謝罪したとある。倭が新羅を従えたことになるが、三国史記の于老列伝（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/227)）では、倭を追い返したことになっている。
　新羅の沾解（てんかい）尼師今（在位 247-261年）三年（249年）「夏四月、倭人、舒弗邯の于老を殺す。（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/18)）」とある。舒弗邯spurkanは新羅17等官位の第一の官職であり、于老urは第十代、奈解（なかい）尼師今（在位 196-230年）の長子であり新羅の王ではない。于老舒弗邯urspurkanが宇流助富利智干と合致する。智は付加語尾ないしは敬辞、美称とされる。列伝では、沾解尼師今七年（253年）とされ、年代が異なるが、そういう伝承もあったのだろう。
　于老は兵馬を熟知し高句麗や百済と戦えば克ち倭軍も破った大将軍でもあり、倭の使臣を饗応して戯れ言で、倭王を塩焼き奴（やつこ）、王妃を飯炊き婦にでもしてみせると語った。伝え聞いて怒った倭王が討伐軍を派遣したため、王は于老に告げ、于老は不謹慎であったと詫びたが、倭軍は彼を焼き殺した。次の味鄒尼師今の時、招かれて来訪した倭の大臣を、于老の妻が私邸で饗応し泥酔させ、庭下に下ろし焼き殺し恨みを晴らした。倭人が怒り金城を攻めてきたが、克てず引き返した、としている。
　倭王と王妃とあり、女王卑弥呼や台与とは該当しないが、時代からすれば邪馬台国の時となる。新羅本紀によれば、建国八年（前50年）に倭人の新羅への侵入が記されるがこれは奴国以前のことである。新羅と加羅との戦は継続し、14年には倭人が兵船百余で金城を攻めたとある。新羅と百済との戦も激しくなってゆく。新羅は59年には倭国と国交を結び使者を交換したとしており、奴国の時となる（建武中元二年｛57年｝、に奴国からの朝賀使へ後漢の光武帝が印綬を賜うている。永初元年(107年)帥升らが生口160人を連れて朝貢）。158年に竹嶺が開通し倭人が来聘し（使節を派遣し礼物を献じる）、173年に卑彌呼の使者が来聘し、208年には倭人が国境を侵犯したとある。そして238年に倭人が金城を囲み、翌年に于老が風を利用して倭人の船を焼き、倭人が溺れ死んだ、としている（邪馬台国の時となる）。
　卑弥呼の時の半島では、公孫氏が呉の孫権に応じ魏を攻撃する約を交わし、孫権が動かぬとみると呉の使者を切り魏の司馬氏に寝返り、諸葛孔明が立つと魏に反旗を飜した。孔明亡き後、これに懲りた魏が公孫氏討伐に動き、公孫氏の退路を断つために帯方郡に太守を派遣すると卑弥呼は呼応し、公孫討伐に寄与した（[魏志倭人伝](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#その年十二月)）。船による物資の補給か、兵の加勢か何らかの重要な貢献をしたのであろう、卑弥呼は親魏倭王に任じられ、魏との交易の利を確保することを成し遂げたことであろう。新羅本紀の倭人侵攻の記述からすれば、倭側には船団があり兵力を派遣する力を有していたとみることができる。卑弥呼は通常巫女の女王、祭祀を旨とするシャーマンというイメージでみられるが、気長足姫尊（神功皇后）にその事蹟が移し替えられているとみるべきであり、その外交・政治手腕が評価される。

**広開土王碑の問題**
　広開土王碑文は全文訳注（[日本古代史ノート](https://mkpo33.jimdofree.com/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0/%E5%BA%83%E9%96%8B%E5%9C%9F%E7%8E%8B%E9%99%B5%E7%A2%91%E6%96%87%E3%81%AE%E5%85%A8%E6%96%87%E8%A8%B3%E6%B3%A8/)）を参照した。解釈は多岐で「高句麗好太王碑文解釈試案、奥田 尚氏、[HP](https://www.i-repository.net/contents/outemon/ir/301/301811209.pdf)」に詳しい。
　國岡上廣開土境平安好太王と云い18歳で王位につき永楽大王と称し、39歳で亡くなっている。永楽元年は辛卯（391年）であり、壬子（412年）に亡くなったことになる（三国史記では癸丑、413年とある）。永楽五年（395年）に軍を率い南下し、襄平道（遼陽方面）を過ぎたとあり、美川王に倣って楽浪方面に向かったのであろう。文面上百済が高句麗に臣従するのは、396年に広開土王が水軍を率いて百済を討伐してからのことであり、新羅が高句麗に臣従するのは、399～400年とあり、旧（もと）百済と新羅が高句麗の属民であったことはない。古来属民で朝貢となれば、常識的には漢以降の中国王朝かと思われる（箕子朝鮮や衛氏朝鮮があるが郡県制に組み込まれておらず、朝貢する対象でもなく、馬韓・辰韓の時となる）。しかしながら、辛卯（391年）に倭が渡海して、百済□□□羅を臣民とした。それで396年に百済を討伐した。百済は58城700村を失い高句麗に臣従した。しかるに399年に、百済は（新羅を攻撃する）倭と通じ、新羅が救援を求めたので、400年歩騎五万で新羅を救援した。これにより新羅城の倭軍は撤退したので、任那加羅まで追撃した。ここからは空欄が多く推察する他ない。從拔城は城名と解釈されているが城名としては奇妙である。城が安羅人守備兵に帰服すとあり、安羅人守備兵がその城を手にしたということか？安羅人がこの機に何らかの役割を演じたようである。新羅王は高句麗に朝貢したのであろう。しかし、404年倭が帯方郡に侵入したため、王はこれを迎撃してこれに壊滅的打撃を加えた、と読める。
「百残新羅舊是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百残□□□羅以為臣民以六年丙申王躬率水軍討伐殘國･･･而殘主困逼獻□男女生白一千人細布千匝跪王自誓從今以後永為奴客太王恩赦先迷之愆録其後順之誠於是得五十八城村七百將殘主弟并大臣十人旋師還都。･･･九年己亥百殘違誓與倭和通王巡下平穰而新羅遣使白王云倭人滿其國境潰破城池以奴客為民歸王請命太王恩慈矜其忠誠時遣使還告以密計十年庚子教遣步騎五萬往救新羅從男居城至新羅城倭滿其中官軍方至倭賊退□□□□□□□□□背急追至任那加羅從拔城城即歸服安羅人戍兵□新羅城□城倭滿大潰城口□□□□□□□□□□□□□□□□十九□□□□安羅人戍兵滿□□□□其□□□□□□□言□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辭□□□□□□□□□□□□□潰□□隨□安羅人戍兵昔新羅寐錦未有身來論事□國岡上廣開土境好太王□□□羅寐□□□僕句□□□□朝貢十四年甲辰而倭不軌侵入帶方界□□□□□石城□連船□□□□□率□□□平穰□□□鋒相遇王幢要截盪刺倭寇潰敗斬殺無數」とある。「百残（百済）と新羅は舊（もと）く是(これ)属民、由来朝貢す。而して倭以て辛卯年に来り、渡海して百残□□□羅を破り、以て臣民と為す。以て六年丙申（396年）王は躬（みずから）水軍を率いて殘國（百済）を討伐す。･･百済の58城を落とし王の城を囲む･･而して殘主は困逼（こんひつ）し、男女生白一千人と細布千匝を獻□し、跪（ひざま）づきて王自ら誓う、今從（よ）り以後、永（ひたぶる）に奴客と為ると。太王は先の迷の愆（あやまち）を恩赦し、其の後順の誠を録せしむ。是に五十八城と村七百を得る。殘主の弟并びに大臣十人を將（ひき）いて旋師（師団で凱旋）し都に還る。･･･九年己亥（399年）百殘は誓を違（たが）え倭と和通す。王は平穰に巡下す。而して新羅は使を遣（つか）はして王に白（もう）して云（い）はく、倭人其の國境に滿ち城と池を潰し破り奴客（百済）を以て民と為す。（新羅は）王に歸す、命を請う。太王は其の忠誠を恩慈矜し（同情し哀れみ）時に使を遣はして、還りて告ぐに密計を以てせしむ。十年庚子（400年）步騎五萬を遣はし往（ゆ）きて新羅を救わしむ。男居城從（よ）り新羅城に至る。倭は其の中に滿ち官軍は方（まさ）に倭賊に至り退く（倭軍が退却したのであろう）□□□□□□□□□背を急追し任那加羅に至る。城を拔きて從（よ）り、城即（すなわ）ち安羅人戍兵（安羅守備兵）に歸服す。□新羅城□城、倭滿ち大きに城を潰す口□□□□□□□□□□□□□□□□十九□□□□安羅人戍兵滿つ□□□□其□□□□□□□言□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□辭□□□□□□□□□□□□□潰□□隨□安羅人戍兵、昔し新羅の寐錦（むきん、王）未だ有身（みずから）來りて事を論ずことなし。□國岡上廣開土境好太王□□□羅寐□□□僕句□□□□朝貢（新羅寐錦が高句麗に朝貢したということか？）。十四年甲辰(404年)、而して倭は不軌（不法）にして、帶方界に侵入す。□□□□□石城□連船□□□□□率□□□平穰□□□鋒相遇（倭軍と戦闘した）。王幢（王旗の軍）は要截（迎撃）し、盪刺（なでさ）す。倭寇は潰敗す、斬殺すること無數」とある。

　高句麗美川王が313年に楽浪郡、帯方郡まで攻め込んでいるが、遼東における燕の脅威があり、百済・新羅を臣従させるような余裕も気配も無く、先にみたように371年百済の近肖古王に平壌まで攻め込まれており、百済が旧（もと）高句麗の属国とするは意味が通らない。新羅本紀奈勿尼師今（なもつにしきん）三十七年（392年）条に、「春正月、高句麗、使を遣す。王、高句麗の強盛を以て、伊飡（2位聖骨）の大西知（だいせいち）の子実聖（じつせい）を送り質とす（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/21)）」とあり、これ以前には新羅が高句麗に臣従したとする記述はなく、新羅が旧く高句麗の属民とすることもない。
　倭と新羅の間の争いは新羅の二代南解次次雄（なんかいじじゆう）十一年（14年）条（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/11)）に「倭人が兵船百余艘海邊の民戸を掠す」とあるごとく、建国当初くらいから相当の規模で行われていたようである。先にみたように、倭は158年には竹嶺に至っており、洛東江を遡り、漢江を南下するルートも利用したと思われる。三国史記に記載される倭軍の度重なる新羅への侵攻、また卑弥呼が公孫氏対応で帯方郡で魏とタイアップしていることからすれば、倭は海上のみならず、洛東江経由南漢江方面からも帯方郡に進出していたとみえ、兵を送り込んだとも想定できる。安羅、多羅、加羅（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を経由し、また、蟾津江を溯り、帶沙、娑陀、己汶に至ったともみられる。
　先に見た「紀」の新羅王の宇流助富利智干の臣従は、三国史記の沾解尼師今三年（249年）于老舒弗邯の事件と対応しており、卑弥呼の末か台与の邪馬台国の時のことである。仲哀天皇九年（200年＋120年＝320年）、新羅王が図籍に封印し、微叱己知波珍干岐を質としたともあり、以来百済も倭の西蕃となるとしており、新羅・百済がこの頃に倭に臣従したとするのが「紀」の伝える処である。
　広開土王碑によれば、辛卯（391年）に倭が渡海して、百済□□□羅を臣民とした。百済が高句麗に臣従したのは399年、新羅が臣従したのが399～400年。404年に帯方郡で高句麗と対峙した主力が倭軍であったとしている。三国史記はかような記述を無視、ないしは否定している。これは後に魏書や宋書に照らしてみることになる。

**仁徳天皇紀と神功皇后紀・応神天皇紀は交叉している**

　「紀」では仁徳天皇紀の六十七の年冬十月（379年10月）から八十七の年春正月（399年1月）まで記述が空白であり、その前やその間、その後の半島での事蹟が神功皇后紀、応神天皇紀に組み込まれる編成となっている。このために、読者は困惑を禁じ得ない。

　応神天皇（誉田天皇）紀では、七年（276＋120＝396年）条に、「高麗人・百濟人・任那人・新羅人並に来朝（まうけ）り。時に武内宿禰に命（みことのり）して、諸の韓人等（からひとら）を領ゐて池を作らしむ」とあり、治水による国土開発が進められ、秦氏の技術が求められ、十四年（283+120＝403年）に百二十県の民を率いる弓月君（秦氏の祖先）を百済から招来せんとした。しかし、新羅に妨げられ加羅で足止めとなり、武内宿禰（たけしうちのすくね）の子の葛城襲津彦（かづらきのそつびこ）を派遣するが果たせず（百済記により葛城襲津彦は新羅に美女で買収され、加羅を攻めたと記されている、神功皇后[六十二年条](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#六十二年)）、これが実現されるのは十六年（405年）に、同じく武内宿禰の子である平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）・的戸田宿禰（いくはのとだのすくね）が加羅に派遣されてからのことであった。
　応神天皇九年条（278＋120＝398年、[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#九年夏四月（うづき）)）には武内宿禰が筑紫に政務を執った時、弟の甘美内宿禰（うましうちのすくね）が兄の武内宿禰は倭（やまと）から筑紫を裂き三韓を招き天下を狙っているという訴えを起していた。これは、甘美内宿禰が敗訴したのであるが、葛城襲津彦が新羅に美女により買収され、反転して加羅を攻めるという事件を起したのが神功皇后の時（262年）に記されており、過去の事件とされるのであるが、上述の403年であるとすれば、葛城襲津彦が武内宿禰の意を受けていた疑いをかけられていたと解釈することも可能となる。新羅の調略は筑紫にも及び、これがくすぶり続けることとなる（仲哀天皇七年「198+120＝318年」に新羅国の塵輪（じんりん）が熊襲を扇動し、豊浦宮に攻め寄せた、とする伝承が長府忌宮神社の数方庭祭にある。[数方庭祭事考](https://www.city.shimonoseki.lg.jp/uploaded/attachment/17371.pdf)）。

　高句麗は豊富な金、銀、鉄に恵まれ、特に鉄の生産量は多く、鉄の加工技術にも優れていた。鉄は農具、武具のみならず、運搬用の引き車の車輪にも用いられ、兵站に優れ、また、各種の効率的な武器も製作されたという。高句麗が強力となったのは、小獣林王（しょうじゅうりんおう、在位371-384年）の時、前燕を討った前秦に臣従し、漢文化（学校制度や律令制度）、仏教を導入し、国力を整備したことによる（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/93)）。それは百済や新羅においても同様であり、倭にも波及することとなる。
　仁徳天皇十二年（324年）に高句麗が鉄の楯と的を貢納したとある。「紀」では仁徳天皇は応神天皇の後であるが、事蹟においては逆転していることがみられる。仁徳期に土木工事に関する鉄器が導入されたのであろうか、低湿地の治水に応用され米の増産につながったようである。また橋をかけ、港が整備され、馬飼も河内で行われるようになり、物資の流通も促進され国力が隆盛し、壮大な古墳が造営されるようになる。百済から豚飼が導入され、家畜の飼育に弾みがついたことであろう、織物や装飾品、家具製作の職人なども招来された。百済では高句麗の侵略で南に押し込まれ、行き場に窮した者達が居た。国力が増し技術者が求められる安全な倭国に避難するという動機も働いていよう。
　仁徳四十一年（353年）に百済王族の酒君（さけのきみ）が勝手な振る舞いをするため、倭（やまと）に放逐され住吉大社の広大な神領の山を管理していた石川錦織首（いしかはのにしこりのおびと）が受け入れ天皇がこれを許したとある。百済の近肖古王の初期（二年条；[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/123)）は宮廷で傍若無人に振る舞う朝廷佐平（司法長官）に病んでいたようであり、相応している。王族の取り込みは、百済、新羅の人質を含め、漢文化受容の一形態となった。
　応神天皇十五年（284＋120＝404年）に百済王（阿莘）は阿直岐（あちき）を派遣した（古事記では照古王「近肖古王」とする）。阿直岐は王仁（わに）を推薦し、荒田別（毛野君の祖）が派遣され迎え入れている。楽浪、帯方郡に入居した漢人は、楽浪、帯方郡が崩壊するとき、高句麗、新羅、百済に吸収され、百済に逃れた高氏、王氏の子孫が高興（こうきょう、百済で書記を編纂）、王仁に連なるとされる。彼等により経典が伝えられ帝王学、国家運営の制度が導入された。高句麗では「留記」、百済では「書記」、新羅では「国史」として国史が編纂されることになる。中国に朝貢し、王や将軍として認証されるには、己が政権の系譜を明らかにせねばならなかった。去來穗別天皇（履中天皇）四年（403年、[書紀巻12](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki28.htm#四年秋八月)）条に、「諸国（くにぐに）に国史（ふみひと）を置く。言事（ことわざ）を記（しる）して、四方（よも）の志（ふみ）を達（いた）す」とある。また、官人の制度を導入するために、その冠や服装を整備せねばならず、裁縫技術を取り込むことが不可欠であり、使者を送る船舶を建造できねばならなくなった。二十年（289＋120＝409年）に阿知使主（あちのおみ）・其の子の都加使主（つかのおみ）、及び十七県の党類が来帰したとあり、東文（倭漢書；やまとふみ）の祖となり、王仁（西文の祖、河内書；かふちのふみ）グループと並び文書処理が強化された。
　応神天皇の名は「紀」では誉田別尊（ほむだわけのみこと）、古事記（以下「記」）では品陀和氣命であるが神功皇后十三年条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#十三年春二月（きさらぎ）)）に角鹿（つぬが）の笥飯大神（けひのおほみかみ）と名を交換したことが記されている。「記」によれば、角鹿の宮の大神が誉田別の名を皇子の伊奢沙和氣（いざさわけ）と交換し、大神が入鹿魚（いるか）を得て御食津（みけつ）の大神、氣比（けひ）の大神を称したという。400～405年在位は去來穗別天皇（いざほわけのすめらみこと、履中天皇）であり、伊奢沙和氣（いざさわけ）と似通った名であり、この時代のひとであったと思われる。

**倭の五王との関連**
　「紀」や「記」にあっては、奴国や邪馬台国が中国王朝に朝貢し倭王に任じられた歴史が省かれたごとく、倭政権が倭王や将軍等に任じられた歴史（倭の五王）は省かれている。宋書の倭国伝では、「倭国は高驪の東南大海の中に在り、世々貢職を修む。高祖の永初二年（421年）、詔していはく、『倭讚、萬里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらは）すべく、除授を賜ふべし』と。太祖の元嘉二年（425年）、讚、また司馬曹達を遣はして表を奉り、方物を献ず（岩波文庫）」とある。「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」を上表していよう。「記紀」の編纂時には、それを隠したが、当時としては、半島での軍事権を中国王朝に承認させることに突き進んでいた。
　使持節（皇帝から全権を委任された節｛旗｝を持つ）・都督（軍政を統轄する）となり、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓の六国諸軍事における安東大将軍を求めるものである。秦韓とは辰韓（新羅）側の西部・南部、慕韓とは馬韓（百済）側の東部・南部と思われ、秦韓・慕韓の間に任那があり、讃は任那を足掛かりにして、百済・新羅・秦韓・慕韓に対する軍事的な影響力を行使していることを認めさせたかったとなろう。先に神功皇后四十九年（249＋120＝369年、[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)）条でみた「比自㶱・南加羅・喙國・安羅・多羅・卓淳・加羅・比利・辟中・布弥支・半古（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）」とあり、これが任那の当初のエリアとなり、半島西部・南部へと拡大してゆくことになったようである。
　応神天皇三十七年（306+120＝426年；[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#卅七年春二月（きさらぎ）)）に、阿知使主（あちのおみ）と都加使主（つかのおみ）が高句麗に行き、高句麗の道案内により呉（宋のこと）に至り、工女（ぬひめ）兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）、呉織（くれはとり）、穴織（あなはとり）を得たとある。百済腆支王（てんしおう）十二年（416年）条に、「東晉安帝、使を遣し、王を冊命して、使持節・都督・百済諸軍事・鎭東將軍・百済王となす（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/125)）」とあり、倭と百済の関係からすれば、百済経由で朝貢するルートかと思われるが、高句麗を経由していることに留意すべきである。
　中国の北方とも南方とも関係を結んできた高句麗は、長寿王（在位413-491年）の元年に晋（東晋）に長史を派遣し、高句麗応・楽浪郡公に任じられ、十三年（425年）には、魏（北魏）に使者を派遣し、二十三年（435年）には、都督遼海諸軍事・征東将軍・領護東夷中郎将・遼東郡開国公・高句麗王に任じられている（四十三年「455年」には宋に使者を派遣し、五十一年「463年」には宋により車騎大将軍・開府儀同三司を任じられている）。倭にも高句麗と協力する勢力があった。恐らくは任那における日本府（やまとのみこともち）が関与していたのであろう。この時点では、高句麗の勢いに注目があり、このルートの方が確実であったと思われる。任那の日本府は新羅、加羅、安羅、百済等、高句麗からの調略に晒され、倭人との混血者が独自の動きをみせることとなってゆく。

　「紀」では大泊瀬幼武天皇（おほはつせのわかたけのすめらみこと、雄略天皇）の二年（458年、[書紀巻14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#二年秋七月)）条に、百済の池津媛（いけつひめ）が石川楯（いしかはのたて）と婬（たは）け二人を焼き殺したとある。これは百済新撰（葢鹵王から武寧王まで五代、455-523年、にわたる史書）により、記されたものであるが、蓋鹵王（がいろおう）の即位を己巳年（429年）としており年代が合致せず、429年のこととするなら応神天皇三十九年（308+120=428年、[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#卅九年春二月（きさらぎ）)）条に、直支（腆支）王が妹の新斉都媛（しせつひめ）と七婦女を任（つか）えさせたとあるも、百済本紀には、かような事件に関する記述はない（百済本紀で428年は、「腆支王、次代の久尓辛王は既に亡くなっており」、毗有王二年に当り、倭国から使者があり五十人が従っていたと記され、関連する記述はない）。百済新撰により「紀」では池津媛を慕尼夫人（むにはしかし）の女（むすめ）適稽（ちゃくけい）女郎（えはしと）としている。王族の娘とか家臣の娘とか解釈が一定していないが、夫人は正妻、女郎は身分のある女性、適はshìで女子出嫁（女子を嫁に出す）、díで正妻所生的兒子（正妻が産んだ子）とあり、稽は説文では「留止」とあり併せて解釈するならば、蓋鹵王の夫人の女（むすめ）で嫁に出した女性とみることができる。倭政権は高貴の女性を求めており、腆支王が妹を送っていることからすれば順当かと思われる。この話は雄略天皇五年（461年）四月条に、「池津媛とは適稽女郎である」と一文を加えて、明確にしている。蓋鹵王はこの事件を伝え聞き、「『 (王は)、女（をみな）を貢るべからず』といふ。乃（すなは）ち其の弟（いろど）軍君（こにきし）【崑支（こんき）なり】に告げて曰（い）はく、『汝（いまし）、日本（やまと）に往（まう）でて天皇に事（つか）へまつれ』といふ」とあり、蓋鹵王には極めて苦渋にみちた事件であったと思われる。

|  |
| --- |
| 三国史記の系譜 |
| 毘有王(20代) | 蓋鹵王(21代) | 文周王(22代；暗殺) | 三斤王(23代；夭折) |  |
| 崑支王（本国で没） | 東城王(24代) | 武寧王(25代) |
| 日本書紀による系譜（百済新撰によると思われる） |
| 毘有王（記載無し） | 加須利君(蓋鹵王) | 婦の子（嶋君）　　　　　　　　　武寧王 |
| 軍君(崑支;倭に派遣) | 末多王（東城王） |
|  | 蓋鹵王の母の弟　　汶洲（文周）王　 | 文斤（三斤）王 |

　蓋鹵王は弟の崑支に天皇に仕えせしむのであるが、崑支は王の婦（みめ）を求めた。崑支には既に五人の子があり己の婦とするものではなく、男のみでは倭側が納得すまいと思ったのであろう。王は意外な反応を示した。王の子を宿している婦（みめ）を同行させ、子を産めば一つ船（母子共々）で送り還せとされた。流産であれば婦を同行させるつもりだったのか？筑紫の各羅嶋（かからのしま）で子が産まれ、嶋君（せまきし）として一つ船で送り還した。この嶋君を武寧（むねい）王としている。
　三国史記、百済本紀（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/128)）では、崑支は蓋鹵王の弟ではなくその子としており、日本（やまと）に派遣される話はない。蓋鹵王亡き後には、文周（もんす、汶洲）が王位を継ぎ、崑支は内臣佐平を任じられ、文周の長子三斤（さむこん）が太子となり、崑支は没する。文周王は三年(477年)に、田猟の際、兵官佐平の刺客に殺されたとあり、13歳の三斤が王位に就くも、三年(479年)で死去し、崑支の子の東城王（牟大/摩帝）が即位する。武寧王を東城王の第二子としている。
　文周王の長子三斤が13歳で統帥権も国政も文周王を暗殺させた佐平に委ねられたとあり、それも早逝、他にも御子があったのであろうが、崑支の子が王位を継ぐことになるが、兵官佐平に内外の統帥権を委ねたとある。「三国史記」は、「紀」、百済新撰の記述を否定するものとなっている。

　倭の五王に関する中国の史書との参照により、百済、新羅、高句麗、倭との関係をみることにより、この辺りの各国の立場がもう少し明らかになるのであるが、もう少し、「紀」の記述をみておきたい

　雄略天皇七年（463年、[書紀巻14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki30.htm#七年秋七月)）是歳条に、天皇が吉備上道臣田狭（たさ）の麗人（かほよきひと）の妻を横取りするために田狭を任那国司（みまなのくにのみこともち）にした話がある。田狭は任那で新羅に助力を求めたため、天皇は田狭の子弟君（おときみ）と吉備海部直（きびのあまのあたひ）赤尾（あかを）とに新羅を討つ詔を発した。この時西漢（かふちのあや）才伎歓因知利（てひとくわんいんちり）が現地の情報通を使うべしと助言し一行に同行させている。一行は任那を避け百済を経由して新羅に向かった。百済の国神が老女となり弟君が新羅への道を尋ねると、まだ1日かかるとのことで、これまたどういうことか、遠いとして軍を引き返した。百済に戻ると、提供された才伎（てひと）を集めるのみで一行は動こうとしなかった。
　任那国司田狭はこれを喜び、弟君に密使を送り、弟君も天皇の不興を得ること明白、日本（やまと）に還らず共に半島に残るべしと戒めた。これを聞いた弟君の婦（め）樟媛（くすひめ）が夫を殺し、才伎等「新漢陶部（いまきのあやのすゑつくり）の高貴（かうくゐ）・鞍部（くらつくり）の堅貴（けんくゐ）・画部（ゑかき）の因斯羅我（いんしらが）・錦部（にしごり）の定安那錦（ぢやうあんなこむ）・訳語（をさ）の卯安那（めうあんな）等」を赤尾と共に連れ帰ったとある。【或本に云はく、吉備臣弟君、百済より還りて、漢手人部（あやのてひとべ）・衣縫部（きぬぬひべ）・宍人部（ししひとべ）を献（たてまつ）るといふ。】とあり、弟君は生きているともしている。倭の五王の朝貢の歴史の記述を回避し、むしろ、陶器、馬具、絵画、絹織物、通訳の才伎集団を取り込むことが目的であったかのごとき記述に転じている。
　政権は吉備の動向に不穏なものを感じていた。七年八月条では、吉備下道臣前津屋（さきつや）（国造の吉備臣山ともされる）が女子の争い、闘鶏にかこつけ天皇にみたてた女子を敗者にし、また、その鶏を殺したとある。天皇はそれを聞くと、物部兵士を派遣しその族を殺した。また、武内宿禰の子の葛城襲津彦以来の一部の葛城勢力への疑念があり葛城円大臣（かづらきのつぶらのおほおみ）を殺しており、物部氏の重用の契機ともなっている。当初半島進出に貢献した勢力の半島での行動に疑念を抱いていたのであろう。

　当時半島においては、長寿王の高句麗が百済、新羅に脅威となっており、大陸では魏（北魏）が燕（後燕）から黄河以北を奪い、北燕・南燕・後秦・夏と対立し、東晋では劉裕が政権を奪取し南燕・後秦を討ち、宋を建国し（420年）、夏や北燕など残存する勢力を滅ぼした北魏と対立し、南北朝時代を迎えていた。高句麗は後燕・後秦及び東晋対応から北魏及び宋の間の微妙な外交を強いられてもいた。
　三国史記によれば、長寿王（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/94)）は先にみたように、元年（413年）には東晋の安帝に朝貢し、高句麗王・楽浪公に封じられていたが、二十三年（435年）に北魏に朝貢し、都督遼海諸軍事・征東将軍・領護東夷中郎将・遼東郡開国公・高句麗王に任じられ、四十三年（455年）に宋に朝貢し、五十一年（463年）に車騎大将軍・開府儀同三司（三公待遇で幕府を開いて属部の幕僚を置くことができる権限）に封じられていた。高句麗は北魏を通じて漢化政策、仏教を導入しており朝貢し臣従するも、一方、国境を接しており、北魏に滅ぼされぬよう警戒も必要であり、東晋や宋にも朝貢した。東晋や宋は高句麗に官職を与え北魏に圧力をかけようとし、北魏もまた同様に官職を与えた。
　広開土王の救援により倭を撤退させた新羅では、実聖尼師今（じつせいにしきん）が元年（402年）に、倭国と国交を結び、未斯欣（みしきん）を人質とするも、405年、407年、408年、415年と倭との戦は絶えず、十一年（412年）に王子の卜好（ぼくこう）を高句麗への人質としている。訥祇麻立干（とつぎまりつかん）の二年（418年）に、卜好が高句麗から帰り、未斯欣が倭国から逃げ帰り、八年（424年）に高句麗と国交を開いている。431年、440年、444年にも倭軍が侵攻しており、444年には倭兵が金城を10日間包囲している。ところが454年には高句麗が北部国境を侵犯し、455年高句麗が百済に侵入した際には救援の軍を派遣しており、外交関係は一筋縄ではない。
　慈悲麻立干（じひまりつかん）の二年（459年）、462～3年、476～7年には倭軍の侵入を受け、468年には高句麗と靺鞨が北部を襲い、474年に高句麗が百済を攻撃し、百済蓋鹵王が文周を派遣して救援を求めた時には、新羅は救援に出兵している（既に百済は陥落し、蓋鹵王は殺されていたとある）。
　「紀」雄略天皇八年（464年）条（[書紀巻14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#八年春二月)）では、新羅が天皇に背き高句麗と好（よしみ）を結び高句麗の精兵百人を駐留させた。ある高句麗兵に危急の帰国命令があり、道中に典馬（うまかい）であった新羅人に「汝國爲吾國所破非久矣、お前の国は我国のために破られることは久しくない」と語った。典馬は「お前の国が我国により破られるのはそう先のことではない」と解釈し、腹を患ったと帰国し王にこれを告げた。王は、「人殺家内所養鷄之雄者」と国人に告げせしめた。「鶏の雄」とは高句麗兵のことで、国人が彼等を殺害し、かろうじて逃げ帰った者が高句麗王に事態を告げた。王は出兵し城を包囲し、兵達に楽舞させ歓声を挙げさせた。新羅の王は任那に救援を求めた。任那王は膳臣（かしはでのおみ）斑鳩（いかるが）、吉備臣（きびのおみ）小梨（をなし）、難波吉士（なにはのきし）赤目子（あかめこ）を差し向けた。高句麗軍は恐れて戦おうとしないため、十余日睨合いとなった。倭軍は夜中に坑道を掘り、荷を隠し、伏兵を残し引き上げた。退却したとみて追撃する高句麗軍を挟み撃ちにして破った。以降新羅と高句麗とは相互に恨みを抱くようになった、としている。
　百済（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/125)）では、三国史記によれば、日本（やまと）に入質していた嫡男の腆支が阿莘王の訃報を聞き、帰国を求め倭王が百人の護衛をつけて送り返したとある。百済では仲弟の訓解（くんかい）が腆支の帰国を待ち治めていたのであるが、末弟の碟礼（せつれい）が殺して王となっており、足止めを余儀なくされたとある。国人が碟礼を殺して後に帰国でき405年に王位についている。これは応神天皇十六年（285+120＝405）是歳条（[書紀巻10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十六年春二月（きさらぎ）)）に相当するのであるが、「紀」によれば、直支（腆支）に東韓（「東韓は、甘羅城（かむらのさし）・高難城（かうなんのさし）・爾林城（にりむのさし）、是なり。」と注されている）を与えたとある。東韓については三ページ冒頭でみたごとく「紀」と百済記と三国史記の記述が合致せず困惑したところであった。地域が未定と注されているが、全州市方面と思われる。この地を百済に与えたとは、この地を倭が支配していたことになる。しかし、三国史記ではそのような記述は全く無い。「紀」によれば同年八月に平群木菟宿禰、的戸田宿禰（共に武内宿禰の子）に精兵を授け、加羅に派遣し、弓月君一行を足止めしていた新羅を討たせ、新羅が恐れ道を開いたとあった。新羅本紀では同年四月に侵入した倭人を王が騎兵を率いて三百余人を殺し捕らえたと記しておりこれも否定したものとなっている。
　三国史記によれば、腆支が人質となったのは、広開土王（談徳）に浿水で大敗し倭国と好を結ぶためとしており、北では高句麗、東では新羅との戦に備える方策とみていよう。王に就任すると晋に使者を送り朝貢し、416年に安帝より、使持節・都督・百済諸軍事・鎮東将軍・百済王を得、かく安全保障を求めたことを優先していよう。ところで王は420年に亡くなり、子の久尓辛（くにしん）が王位に就くも427年に亡くなり、その子（あるいは腆支の庶子とも記される）の毗有（ひゆう）が王となる（三国史記では公式には久尓辛を腆支の長男、毗有を久尓辛の長男とし、対中国外交上、王位継承の正統性を保ったとみられるが、久尓辛を美姿貌とし、女王であった暗示も残した。[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/126)）。長寿王の高句麗の脅威の下、毗有王は宋に使者を送り朝貢し、430年文帝より腆支が得たと同様の爵号を得ている。433年には同じく長寿王の脅威下にある新羅に使者を送り和親を図っている。455年に毗有王が亡くなると長子が即位し、蓋鹵王は472年に北魏に使者をおくり、高句麗の不義を訴え征伐を求めている。
　金富軾はこの経緯を詳しく記しており、余程重視したのであろう、北魏は高句麗を藩屏であり法を犯す愆（あやまち）はないとし、過ちがあれば討伐するとの返答であった。しばしば高句麗の侵略を受けており、蓋鹵王は北魏に救援を求めるも出兵はなく、結局、北魏への朝貢を止めたとある。その間、高句麗は百済に僧侶の道琳を間者として送り込み宮殿修復などを建言させ、財と人民を動員させ国力を浪費させ、475年に漢城を攻め落とした。蓋鹵王が殺され、百済は漢城から追われ扶余に逃れることになった。

宋書倭国伝（沈約、しんやく､441～513年、による編纂）によれば、この冒頭にみたように倭は永初二年（421年）、元嘉二年（425年）に宋に使者を送り朝貢し上表したが得た爵号は不明であった。元嘉十五年（438年）「賛（讚）」の弟の「珍」となって、「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称して、「安東將軍、倭國王」に除され、倭随等十三人が平西・征虜・冠軍・輔国将軍に除されている（倭随に諸説あり定まらない。字義からすれば倭が任じ、倭に隋「したが」う現地での将軍ではないか）。元嘉二十年（443年）に次の王、「濟」が安東將軍、倭國王に除され、二十八年（451）には、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事を加へ、併せて、二十三人が「軍郡に除」されており、軍事の官、郡政の官に現地の将軍や官人を用いたのであろう。「武」の上表にも半島の95国（邑レベルであろう）を平定したとあり、宋が実態のない叙任をしたとはし難い。宋は百済に「使持節・都督・百済諸軍事・鎮東将軍・百済王」を叙した経緯があり、百済を除外したのであろう。
　世祖（考武帝）の大明六年（462年）条では、「興」は「濟」の爵号を継いで除されていたのであるが、「興」が亡くなると、その子の「武」は「使持節、都督倭、百濟、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を自称した。先にみた「紀」雄略天皇八年（464年）条では、新羅を救援し高句麗を討ったとあり、そのような自負があったとみうけることもできよう。順帝の昇明二年（478年）に、百済を除き、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除されたとある。「武」の表は倭国伝に記されており（38頁）、倭国の東夷55国、西夷66国、半島の95国を平定し、百済を経由して朝貢するも、高句麗が道を妨害する。「濟」がこれを討たんとしたが亡くなり、喪で兵を動かす事が出来なかった。今順帝の徳を以てこれを討ちたい、開府儀同三司に除されれば忠勤に励むと上申している。雄略天皇二十三年是歳条（479年、[書紀巻14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki32.htm#廿三年夏四月)）に、「筑紫の安致臣（あちのおみ）・馬飼臣（うまかひのおみ）等（ら）、船師（ふないくさ）を率（ひき）ゐて高麗（こま）を撃つ」とあり、高句麗に派兵されていた。
　雄略天皇十四年(470年、[書紀巻14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki31.htm#十四年春正月))条において、呉（宋）に派遣した身狭村主青等（むさのすぐりあをら）が呉国の使と共に、「手末（たなすゑ）の才伎（てひと）、漢織（あやはとり）・呉織（くれはとり）及び衣縫（きぬぬひ）の兄媛（えひめ）・弟媛（おとひめ）等」を連れて帰国したとあり、これを成果として記すのみである。使者の饗応が行われたのであるが、饗応役の根使主（ねのおみ）が亡くなった大草香皇子（おほくさかのみこ）の玉縵（たまかづら）を着服していたことが発覚し、これを処分したという事件である。応神天皇のケースと同じく才伎獲得を成果としているのみで、宋の使者の役割については触れられていない。
　白髮武廣國押稚日本根子天皇(清寧天皇)四年（483年、[書紀巻15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki33.htm#四年春正月)）条に、「海表（わたのほか）の諸蕃（くにぐに）の使者（つかひ）に朝堂（みかど）に宴（とよのあかり）す。物賜（たま）ふこと、各（おのおの）差（しな）有り」とある。大々的な儀式が催され、清寧天皇の即位ならびに前天皇が「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王」に除されたことへの祝賀があり、後に大いなる饗応の宴が続いたことであろう。しかし、そのような記述はない。宋自体が479年斉王、蕭道成（しょうどうせい；南斉の祖）に政権を禅譲せざるを得なくなり、叙任した主体に実権はなかった。受任した天皇も崩御しており、双方の当事者がなく、叙任が意味を為さないといふ現実は、倭政権にとっては大きな教訓になったはずである。
　　沈約は同時代、南朝「梁」の史家であり、宋の明帝より、泰始初（465年）24歳頃に晋史編纂の勅を得て、120巻程仕上げていたがこれは未完となった。宋代も資料を収集し続けており、南斉の武帝蕭賾（しょうさく）永明五年（487年）春に宋書編纂の勅命により着手し、翌年二月に作業を終えている。非常に短期間の編纂であり、沈約が周到に準備していた結果であろう。これは、彼にとっては現代史であった。
　華北には北魏が優勢となり、その後は東魏・西魏に分かれ、契丹が東魏の東北から南下し高句麗の北に迫り、高句麗は漢江まで南下し、百済は錦江流域に追いやられ、新羅との間に慕韓、任那、秦韓あるいは、慕韓、任那、加羅、秦韓があり、東海に倭ありという認識であろう（[地図](https://www.wikiwand.com/ja/%E8%A5%BF%E9%AD%8F)、wikiwand）。650年以上後の三国史記には慕韓、任那、秦韓が現出しないため、存在が疑われているのであるが、当時の当事者達が相互に相手を牽制するためにその承認を求め上表したものであり、中国の政権が叙任するに幻の国を列記して承認することはあるまい。
　爵号の除授については、大陸から半島まで支配権の及んだ漢や魏や晋の時代と黄河以北に南朝の支配が及ばなくなって以降の時代では、その実は異なる。南朝によるものは、正当性の誇示となっても相手を牽制する実は低下していた。「卑弥呼」が得た「親魏倭王」と「武」の得た「使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王」とは内容が異なるが、半島に於ける効力は「親魏倭王」の時の方が勝っていたことであろう。
　倭の五王に関する記述が「記紀」において隠され、三国史記において削除され、中国の記録に残ることになった。このため、この間の歴史については、立場によって、全く異なる批判が加えられ、任那など無かったということにもなった。
　宋（南朝）は孝武帝が464年に崩御すると、内紛が繰り返され、遠征などで財政悪化を招き弱体化し、479年には順帝を立てた蕭道成が禅譲により斉(南斉)を開くことになった。半島では南朝の威光が、事実上あまり意味を持たなくなった。これが再び大きく影響を持つのは、唐代になってからのことである。

**倭軍の世代交代**
　弘計天皇（顕宗天皇）三年(487年、[書紀巻15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki33.htm#三年春二月)）是歳条に、紀生磐宿禰（きのおひはのすくね）が三韓の王たらんとして自らを神聖（かみ）と称し、高句麗と結ぼうとしたとある。任那の左魯（さる）、那奇他甲背等（なかたかふはいら）がこれを策しており、百済の適莫爾解（ちゃくまくにげ）を爾林（にりむ、爾林は高麗の地と記されている、[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）に殺している。百済王（東城王）が怒って帯山城を築いて攻めたとある。爾林には諸説があるが、「紀」では、帯山に近く、そこまで高句麗の地であったとみていた。紀生磐宿禰は逆襲したが、兵力を失い任那に戻り、百済は、佐魯、那奇他甲背等三百余人を殺したとしている。
　紀生磐宿禰は、紀小弓宿禰（きのをゆみのすくね）の子で、雄略天皇九年（465年）三月条の紀大磐宿禰のことである。新羅が背き、対馬方面まで進出し、高句麗の貢を妨害し百済の城を併合するに及び、天皇親征を図るが神がこれを戒め、派遣されたのが紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰（そがのからこのすくね）・大伴談連（おほとものかたりのむらじ）・小鹿火宿禰等（をかひのすくねら）であった。大伴談連等が戦死し、紀小弓宿禰が病死したと聞き、紀生磐宿禰が海を渡り、小鹿火宿禰（紀小弓宿禰の子と注される）と合流する。紀生磐宿禰が小鹿火宿禰の指揮権を奪ったことで、小鹿火宿禰が韓子宿禰に指揮権を狙われていると告げ、紀生磐宿禰と韓子宿禰間に対立が生じる。百済王（蓋鹵王の時）がこれをみて、韓子宿禰に（高句麗に面する）百済国境に来て欲しいともちかけた。河に至り馬に水を呑ます紀生磐宿禰を背後から韓子宿禰が射た弓矢が鞍に当り、紀生磐宿禰が逆に韓子宿禰を射殺すことになり、百済にも至らず引き返したとある。

左魯と那奇他甲背等は現地での倭人と現地婦、現地人と倭婦の間での混血であり、任那で実権を有していたとみられるようである。現地では加羅、安羅、新羅、百済、高句麗からの調略の真っ只中にあり、その時々の半島の情勢、何処と何処とがどう通じ合っているかの情報を倭から来る将軍に提供していたのであろう。
　億計天皇（仁賢天皇）六年（493年、[書紀巻15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki33.htm#六年秋九月（ながづき）)）条に、日鷹吉士（ひたかのきし）を高句麗に派遣し巧手者（てひと）を求め、工匠（てひと）須流枳（するき）・奴流枳等（ぬるきら）を連れて帰ったとある。高句麗の皮加工の熟練工達であり、馬具や武具に関するものであろうが、金属加工に関する技術も伴っていよう。相変わらず工匠の記述であるが、政権が高句麗との関係を結んでおり、紀生磐宿禰、左魯、那奇他甲背等の行動はその動向の一貫であったかもしれない。百済と新羅がこれを警戒し、連携して紀小弓宿禰の軍を分断し、左魯、那奇他甲背等を殺したともみえる。倭政権は高句麗の背後の北魏にも関心があったろう。

　北魏は幼い孝文帝を摂政する馮太后（ふうたいごう）が漢化政策を執り、宋から亡命してくる漢人を登用し、484年に俸禄制、485年には均田制、486年には三長制を導入し、孝文帝を始め子弟に儒教教育を徹底させたという。官僚たちに俸禄を与へ、民から勝手に取り立てて収入を図ることを禁止した。その上で、五家を隣、五隣を里、五里を党とし、それぞれに長（隣長、里長、党長；三長）をおき、彼らに戸籍の作成、租税の徴収を行わせる一方で、三長に免役の特権を与えた。穀物を植える田を露田（正田：栽培地、倍田：休耕地）、桑を植える田を桑田、麻を植える田を麻田と土地を分類し、男夫（15歳以上の男子）に露田80畝（正田40畝、倍田40畝）、桑田20畝あるいは麻田10畝、夫人（既婚女子）に正田20畝、倍田20畝、麻田5畝を与へ、夫婦に対して、租として粟2石、調として帛布1匹あるいは麻1匹布が課せられた。未婚の男性にはこの四分の一が課せられ、国の税収とされた。自立していない民、つまり荘園等の奴婢に関しても、適用され、耕牛にも、正田30畝・倍田30畝（4年間）が適用され、奴婢には八分の一、牛に対しては二十分の一が課せられた。また、園宅地として良人3人に1畝、奴婢5人に1畝が与へられたともあり、民、荘園を有する貴族からも国に税が入る仕組みを整へたとなろう。男夫は死ぬか70歳になると露田と麻田を国に返納せねばならず、夫人の場合は夫の死、離縁となると返還を迫られたようである。国の体制を大胆に変革していた。
　高句麗は北魏のこのような漢化政策に影響を受けており、倭政権にも伝わってきていたのであろう。高句麗との交易を担ったのが吉士の族であった。日鷹吉士は麁寸（あらき）を連れていた。彼は、難波玉作部鯽魚女（なにはのたますりべのふなめ、難波の玉作部の女性）と韓白水郎𤳉（からまのはたけ、素潜り漁のみならず、水上輸送･航海にたずさわる）との血を引く者である。先にみた（雄略天皇八年条）高句麗に攻められた新羅を救援するために派遣された任那の日本府（やまとのみこともち）の行軍元帥等の一人が難波吉士赤目子であった。難波吉師に関しては、「姓氏録」、右京諸蕃下に、「難波連、高麗国好太王より出ず」とある。彼等は高句麗の変貌、その背後の北魏に関する情報も得ていたことであろう。
　億計天皇（仁賢天皇）八年（495年）十月条に、「是（こ）の時に、国中（くにのうち）、事無くして、吏（つかさ）、其の官（つかさ）に称（かなふ）ふ。海内（あめのした）、仁（うつくしび）に帰（おもぶ）き、民（おほみたから）、其の業（わざ）を安（やすみ）す」、是歳条に、「五穀（いつつのたなつもの）登衍（おひゆたか）にして、蚕（かひこ）麦（むぎ）善（うるは）しく收（をさ）む。遠近（みやこひな）清（す）み平（やはら）ぎて、戸口滋殖（おほみたからますますうまは）る」とある。

　仁賢天皇が十一年（498年）八月に崩御されると、大臣（おほおみ）平群真鳥臣（へぐりのまとりのおみ）が国政を牛耳り「日本（やまと）に王（きみ）」たらんとした（[書紀巻16](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki34.htm)）。仁賢天皇の太子、小泊瀬稚鷦鷯尊（をはつせのわかさざきのみこと、武烈天皇）が物部麁鹿火大連（もののべのあらかひのおほむらじ）の女（むすめ）影媛（かげひめ）を妻とせんとしたのであるが、平群真鳥臣の子、鮪（しび）と既に出来ていた。媛は一人で太子と会うことを恐れ、衆の集る海柘榴市（つばきち）の巷（ちまた）で太子を待受け歌場（うたがき）で歌を交わした。そこに鮪も割って入り、太子は媛と鮪がすでに出来ていることを知る。
　怒った太子の意を受けて大伴金村が数千（ちあまり）の兵で鮪と媛を殺し、また、平群真鳥臣をも討ち太子のために政権を取り戻した。平群真鳥臣と姻戚関係結ぼうとしていた物部麁鹿火大連にとっても打撃となった。平群真鳥臣は大伴氏、物部氏と共に雄略天皇の政権奪取を助け、天皇を支え、吉備勢力を押さえて、後継者として白髮天皇（清寧天皇）を後押した立役者であった。かくして、大伴金村が一人重きをなすこととなった。
　武烈天皇四年（502年、[書紀ただ巻16](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki34.htm#四年夏四月)）是歳条に、百済の末多王（東城王）が無道で国人が見捨て嶋王（武寧王）を立てたとある。これは「百済新撰」による。百済本紀によれば、東城王二十一年（499年、[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/130)）の旱魃で国民が飢え、互いに殺し合って食い、盗賊が横行し、臣や官人が穀物倉庫を開くことを王に求めたが、聞かず北方の民二千人が高句麗逃げたとある。翌年の冬十一月に田猟に出て大雪で閉じ込められたときに王に刺客が差し向けられ、その傷により十二月に亡くなったとしている。
　東城王のときには、北魏が南下政策をとり、百済にも圧力をかける事態となり、百済は高句麗の脅威もあり、大陸においては南斉、半島においては新羅と結び、対抗をしていた。両者は相互に高句麗の侵略に救援軍を派遣して防衛をしていた。百済を含む七国諸軍事、安東大將軍、倭国王を求める日本（やまと）は高句麗と往来があり、百済が一定の距離を置いていたことは、すでにみた。南斉書（梁の歴史家、蕭 子顕「しょう しけん、487年 - 537年蕭道成の孫」による）によれば、東城王は南斉に家臣の将軍職任官を求め、認可されたとある。また、半島の南、耽牟羅までを攻めていた。百済は南下を余儀なくされていた。
　その東城王が亡くなり、武烈天皇六年（504年）に百済から麻那君（まなきし）が派遣され、翌年に百済王（武寧王）は王族の斯我君（しがきし）を派遣してくる。麻那君は王族ではなく、武寧王となり改めて倭との関係改善が図られた。斯我君の子が法師君（ほふしきし）、倭君（やまとのきみ）の先（おや）となった。（継体天皇七年｛513年｝に武寧王の太子、純陀（じゅんだ）の死が記される。武寧王の子の純陀は三国史記には記載が無い。続紀、延暦八年条に皇太后高野｛もと和氏｝新笠｛父は和乙継｝の伝に「后の先、百済武寧王の子、純陀（じゅんだ）太子より出ず」とあり、姓氏録、左京諸蕃の和朝臣は、「和朝臣は百濟國都慕王十八世孫武寧王より出る」とある。倭君と和史｛やまとのふびと、和氏｝が同一視されるが別。倭君は斯我君の後であり、純陀の後ではない。ただ、太子純陀が来日したことは記されておらず、純陀から新笠｛桓武天皇の母｝に至る系図は不明。）
　ただ、先に見たように、この時期の百済ではそれぞれの王族を支える勢力が正統性を争っており、系図も伝承により異なった。近くは新羅と連携する勢力、加羅や安羅と連携する勢力、遠くは南斉、倭との連携を求める勢力と分かれていたのであろう。
　武烈天皇は、孕める婦の腹を刳くなど、子づくりとは逆行する所業であり、大連である大伴金村は後継者問題に頭を悩ませていたことだらう。八年（526年）の冬に武烈天皇が突如崩御され、一気に後継者問題となった。大伴金村が可能性のある人物として誉田天皇(応神天皇)の五世孫とされる彦主人王（ひこうしのおほきみ）と足仲彦天皇（仲哀天皇）の五世孫の倭彦王（やまとひこのおほきみ）から彦主人王を選び（[書紀巻17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm)）、物部麁鹿火、許勢男人がこれに同調し大勢が決した。「紀」においては系図が示されない彦主人王が男大迹天皇（継体天皇）として即位される異例の事態であった。
　彦主人王は、三国（みくに）の坂中井（さかなゐ、福井県坂井市）より兵に警護され、樟葉宮（くすはのみや、枚方市楠葉）に入られた。大伴金村は彦主人王と懇意であったのだろう河内馬飼首（かふちのうまかひのおびと）荒籠（あらこ）を通じてその意を伝えていた。奈良にはこの人事に反対する勢力も根強かったとみえ、淀川水系に拠点を設けられ、磐余（いはれ）玉穗宮（たまほのみや、桜井市池之内）に移られるのは二十年（526年）のこととなる。
　大伴金村、物部麁鹿火、許勢男人が政権の中枢となったが、盤石ではなかった。それは、半島に於ける政策にも影を投げかけることになった。

**任那の混乱**

　男大迹天皇（継体天皇）の二年（508年、[書紀巻17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#二年冬十月（かむなづき）)）に、「南の海中（わたなか）の耽羅人（たむらびと）、初めて百済国（くだらのくに）に通（かよ）ふ」とある。これは百済本記からとったと注され、百済が耽羅（済州島）を従えたということであるが、三国史記百済本紀では、文周王二年（476年）に、「夏四月に、耽羅國（済州島の国）方物を獻じ、王喜びて、使者を拜して恩率（3等官の位）と爲す（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/128)）」とし、東城王二十年（498年）に、「八月、王、耽羅貢賦を修めざるを以て、親ら征し武珍州に至る。耽羅之を聞きて、使を遣はし罪を乞ふ。乃ち止む。耽羅、即ち耽牟羅（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/129)）」としている。「紀」では気長足姫尊（神功皇后）四十九年（249＋120＝369年）条（[書紀巻9](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)）に、「南蛮（ありひしのからくに）の忱弥多礼（とむたれ）を屠（ほふりさ）き、百済に賜ふ」とあり、忱弥多礼（耽羅）はこの時に百済に与えたとしている。
　後漢書、東夷列傳、弁辰に、州胡国（馬韓の西、海の島上に州胡國有り。其の人、短小、髡（はげ）頭、韋衣（毛皮）を衣、上有りて下無し。好んで牛豕を養ふ。船に乘りて往來し、韓中にて貨市す）とあるのが忱弥多礼とみられている。江南や山東半島から避難する漢人、五島列島や有明海からの倭人が訪れる地ともされ、交易に携わる駕洛国や奴国や邪馬台国も中継地点、嵐の際の避難所として利用していたことと思われる（耽羅の起源に関しては、高麗史巻57地理志2[耽羅縣](https://zh.wikisource.org/wiki/%E9%AB%98%E9%BA%97%E5%8F%B2/%E5%8D%B7%E4%BA%94%E5%8D%81%E4%B8%83)に別説あり）。

　高句麗の南下に苦しむ百済としてはかつての馬韓の地を併合することに活路を見出していた。継体天皇三年(509年)、任那の日本（やまと）の県邑（あがたむら）に居た百済の民が逃げたとある。百済では武寧王六年(506年) 大疫（疫病が大流行し）、不雨（旱魃）川澤渇（水不足）、民が飢え、靺鞨が攻め込み、翌年には高句麗が靺鞨と謀って漢城を目指しており、王は撃退するのであるが、堤防工事など人手が足りなくなり、同十年（510年）に内外の游食（遊民）を集めて帰農せしめている（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/130)）。同十二年には梁に使者を送り上表したのであろう。二十一年(521年)に使持節・都督・百済諸軍事・寧東大将軍を得ており、梁による対外承認を求めていた。ただ、国土が極めて狭く、倭に国土の譲渡を求めてきていた（三国史記には一切記述はない）。

　継体天皇の六年（512年、[書紀巻17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#六年夏四月)）に武寧王は、任那国（みまなのくに）の上哆唎（おこしたり）、下哆唎（あろしたり）、娑陀（さだ）、牟婁（むろ）、四県（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を合併せんとして申し入れてきた。哆唎国守（たりのくにのみこともち）穂積臣押山は、日本（やまと）は維持困難とみ、将来的にも百済が維持できるか懸念があったものの、百済に合わせることを現実的とみてこれを進言した。大伴大連金村も、これをやむなしとした。物部大連麁鹿火（あらかひ）の妻は気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）以来の旧臣等の反対に配慮して、夫に病を理由に使者を辞せしめた。穂積臣押山は百済から買収されたと噂をたてられた。
　同七年(513年)、武寧王は姐彌文貴将軍（さみもんくゐしやうぐん）、州利即爾将軍（つりそにしやうぐん）を派遣し、五経博士の段楊爾（だんやうに）を答礼とし、更に、伴跛国（はへのくに）が己汶（こもん）を略奪したのを返還せしめるよう申し入れてきた。五経とは詩経、書経、礼経、易経、春秋であり、これまでの才伎獲得とは異なる。太子をはじめ政権中枢を担う大臣・大連等有力豪族の子弟を教育するに不可欠の学とする意識が働いていよう。この知識無くしては、大陸はもとより、半島においても、宮廷では未開人扱いされる。伴跛国は、星州付近、大邱（卓淳）の西、高霊（加羅）の北あたり、任那の北部の勢力である。
　振り返ってみれば、奴国、邪馬台国の時から倭は新羅の南下に病む弁韓を支援する形で半島に出ており、後漢や魏との交易を通じて馬韓から楽浪郡への海上の中継地、洛東江から南漢江、蟾津江上流へと進出していったのであろう。親魏倭王となったことがこれを加速させた。

|  |  |
| --- | --- |
| 小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)　[コトバンク](https://kotobank.jp/image/dictionary/nipponica/media/81306024010081.jpg%EF%BC%89)に掲載 | 気長足姫尊四十九年（249＋120＝369年）条比自㶱、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅、比利、辟中、布弥支、半古（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）元嘉二十八年（451）倭王濟　使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭国王昇明二年（478年）倭王武百済を除き、使持節、都督倭、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王継体天皇六年（512年）上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の譲渡 |

　371年に百済近肖古王が平壌に侵攻した時には、倭政権の葛城（武内宿禰の子孫）、吉備系の軍が百済と連携し影響力を行使していた。仁徳天皇以降、倭政権内で権力闘争が続き、半島政策に一貫性を欠くこととなると、現地婦人との混血による子孫が任那内で力を発揮し始め、葛城・吉備の勢力が失脚せしめられると、域内のそれぞれ現地勢力が息を吹き返したのであろう、加羅、秦韓、慕韓としてまとまりを形成し、任那は安羅方面に後退したのであろう。
　武烈天皇の急逝、系図が判然としない継体天皇の擁立による豪族間の分断により、半島情勢は更に流動化した。武寧王がいわゆる慕韓の地の譲渡を求め、倭政権がこれに応じたことで、現地勢力は反発した。

　継体天皇七年11月には、百済の姐彌文貴將軍（さみもんくゐしやうぐん）、斯羅（しらき）の汶得至（もんとくち）、安羅（あら）の辛已奚（しんいけい）及び賁巴委佐（ほんはわさ）、伴跛（はへ）の既殿奚（こでんけい）及び竹汶至（ちくもんち）等が招集され、己汶を百済に帰属せしめた。伴跛は更に戢支（しふき）を派遣し、珍宝を献上して己汶の返還を求めたが、容れられず、同8年（514年、[書紀巻17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#八年春正月)）三月、伴跛は子呑（しとん）、帯沙（たさ）に城を築き、満奚（まんけい）とつなげ、ノロシや兵糧庫を備え、蟾津江沿いに己汶防衛に入り、更に洛東江方面新羅に面しても城を築き、新羅を攻め略奪の限りを尽くしたとある。

　同9年二月の物部連が五百の舟師により帯沙江に入り、百済の文貴将軍も新羅から合流し、帷幕を張り野営した。伴跛はゲリラ戦を仕掛けた。衣裳がいつの間にか盗まれ、持ち物が密かに消え去り、帷幕に火が放たれた。物部連等は恐怖に駆られ河口から逃げ出し、汶慕羅（もんもら）島に撤退した。同10年百済は木刕不麻甲背（もくらふまかふはい）を派遣し事態を打開せしめたのであろう、物部連等は己汶に入り、更に百済に迎え入れられた。秋九月に百済は、日本（やまと）に州利即次将軍（つりそししやうぐん）を派遣し物部連等を帰国させ、五経博士漢高安茂（あやのかうあんも）を博士段楊爾に交代させた。更に、百済が高句麗の使者、安定等（あんていら）に副えて、灼莫古將軍（やくまくこしやうぐん）と日本（やまと）の斯那奴阿比多（しなのあひた、やまと系百済人/科野直説もあり）を派遣して好（よしび）を結んだとある。

　三国史記においては、これに関するような記述は一切無い。武寧王十二年（512年、[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/130)）に高句麗軍が加弗城、円山城を奪い、王がこれを撃退したとある。同二十一年（521年）条によれば、その後年々衰弱し、この年にはイナゴの害で民が飢え、九百戸が新羅に逃げた。梁に使者を派遣し、累々高句麗を破ったと上表し、通交に與（あず）かり*強国*となり、梁から使持節・都督・百済諸軍事・寧東大将軍を授かったとある。高句麗文咨明王（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/98)）の時に当り、百済へ侵入した旨あるのみで、この時期高句麗は、梁、北魏への朝貢を重ねていた。
　衰弱した百済が強国となり上記爵号を授かったという奇妙な記述の裏は、武寧王が哆唎・娑陀・牟婁・己汶を得、更に伴跛を押さえたということを己の成果として梁に上表したと考えるのが合理的であろう。　三国史記からすれば、百済が敵対する高句麗の使者を先導するなどありえない想定となろう。しかし、伴跛の地は高句麗・百済・新羅・任那の係争地でもあり、時々に勢力が入れ替わるのであり、裏で人が意外なつながりを有していておかしくない地域でもあった。「紀」の注によれば、「高句麗の使者が日本に来た確実な例としてはこれが初見である」とある。顕宗天皇の時に紀生磐宿禰、任那の左魯、那奇他甲背等が高句麗と結ぼうとしたとあり、仁賢天皇の時に日鷹吉士を高句麗に派遣しており、今回の譲渡に当って日本(やまと)側から百済に高句麗の使者を同行させることを条件とし、それが可能となるような情勢があったと考える他あるまい。

**磐井の乱**武寧王は二十三年（523年）漢城に幸（行幸）したとあり、高句麗から漢城を取り戻していたようであるが、漢城から帰ると亡くなっており、その子明穣（聖王）が即位する。聖王は八月浿水に侵入した高句麗を退け、二年（524年）に梁より持節・都督・百濟諸軍事・綏東將軍・百濟王に冊命され、三年に新羅と国交を結んでいる。
　新羅では智證麻立干（ちしょうまりつかん　[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/26)）六年（505年）に国内に州・郡・県（郡県制）を導入している（四年条によれば、それまで国名が未定で斯羅「しら」、斯廬「しろ」、新羅「しんら」と称した。新は「徳業日に新た」、羅は「四方の義を網羅す」で新羅とすべし。また、王の名称が居西干、次次雄、尼師今、麻立干であったが国王とすべしとされた）。新羅国、法興王（ほうこうおう）の誕生であり、漢化政策導入を進めた。四年（517年）に兵部を置き、七年（520年）には律令を導入し、官位による百官の服装や服色を定め、準備が整い、八年（521年）梁に朝貢している。同年武寧王が梁より、使持節・都督・百済諸軍事・寧東大将軍に任じられており、新羅は対高句麗で共同歩調を取る百済経由で梁に入ったのであろう、新羅の南朝への始めての朝貢記述である（三国史記（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/22)）では奈勿尼師今二十六年（381年）に衛頭を符氏の秦（前秦）に派遣したとある。太平御覧巻7814夷部東夷新羅「[中國哲學書電子化計劃](https://ctext.org/text.pl?node=399588&if=gb)」では符堅建元十八年「382年」のこと。新羅の意向というよりは符氏が新羅の美女を求めたことによるように思われる。前秦烈宗太元二年「377年」に新羅は高句麗に伴われ前秦に入貢「資治通鑑巻104「早稲田大学[25/60](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko01/bunko01_01821/bunko01_01821_0037/bunko01_01821_0037.pdf)」したとあり、高句麗が新羅に前秦の技術力の高さを見聞させたようである）。
　高句麗の安臧王（あんぞうおう　[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/99)）は二年（520年）に、梁より寧東将軍・都督營平二州諸軍事・高句麗王、北魏より安東将軍・領護東夷校尉・遼東郡開国公・高句麗王に冊封されていた。梁からすれば北魏内東部の營洲と平州二州の諸軍事に寧東将軍として高句麗を認めるというはあからさまな北魏牽制である。北魏にとって營平二州は遼西郡であり、高句麗は遼東郡の安東将軍・領護東夷校尉にすぎない。ところが北魏では、孝文帝が都を平城より洛陽に移して以降、多くの鎮（行政区）が州や郡に編成されたものの北方の辺境で侵入を防御する六鎮は放置された。北方警備として特権を与えられていた彼等が「府戸」に編入され、中央から派遣されてきた長官に搾取される身となり、正光四年（523年）に反乱を起し、東魏・西魏に分裂することになる。梁もこの反乱に乗じて北魏を攻撃した。營平二州は係争地化していた。
　高句麗は北魏と梁の動向を慎重に窺っていたのであろう。百済と新羅は梁の信認を得て、高句麗を牽制しようとしたが、梁そのものも高句麗をあてにしており、実効性は期待できなかった。その中で、倭が高句麗と好を結ぶ動きが見られたことは極めて憂慮すべき事態であった。
　法興王は、九年（522年）に加耶国王の花嫁の求めに応じ、十一年（524年）に南部国境に勢力を拡大し、加耶国王に圧力をかけたのであろう、加耶国王が来て会盟している。十九年（532年）には金官国王、王妃、三王子が来降し、本国を食邑として与えた。

　継体政権の半島政策に対する任那の現地勢力の不満と不安による動揺であった。新羅が南部国境に進出したことに対抗して継体政権は二十一年（527年、[書紀巻17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki35.htm#廿一年夏六月)）に、「近江毛野臣（あふみのけなのおみ）、衆（いくさ）六萬（むよろづ）を率（ゐ）て、任那（みまな）に往（ゆ）きて、新羅に破られし南加羅（ありひしのから）、喙己呑（とくことん）を爲復（かへ）し興建（た）てて、任那に合（あは）せむと」した。ところが筑紫国造磐井が肥前肥後、豊前豊後を抑え、高句麗、百済、新羅からの貢納の船を誤導し近江毛野臣の船を遮断した。継体政権の半島政策に不満を持つ磐井を新羅が後押ししていた。磐井は同じ釜の飯を食った仲ではないかと近江毛野臣を誘いこもうとしたが、近江毛野臣は応じなかった。
　政権は物部麁鹿火大連（「記」では物部大連と大伴連）を選び、天皇は「長門（ながと）より東（ひむがし）をば朕（われ）制（かと）らむ。筑紫より西（にし）をば汝（いまし）制（かと）れ。専（たくめ）賞罰（たまひものつみ）を行へ。頻（しきり）に奏（まう）すことに勿煩（なわづら）ひそ」と詔された（以東以西は、漢籍の「闑以内・闑以外」の引用と注されて漢文表現上のこととみなされるも、武内宿禰が「倭（やまと）から筑紫を裂き三韓を招き天下を狙っている」と訴えられた事件からすれば、そういう動きも考慮する必要があろう）。天皇は以西における賞罰の権限を托した。二十二年に筑紫の御井郡の交戦で磐井は敗北し、筑紫君が糟屋屯倉を献上して死罪を免れたとある。
　二十三年条において、加羅が何故日本（やまと）を恨み新羅と結んだか、その経緯が語られている。穂積押山臣を通じて百済武寧王は、日本（やまと）に貢を送るに半島南の海上航行は風波で苦しむため、内陸河川で運び加羅の多沙津（たさのつ）から出港させたいと申し出た。政権は使者を送り、加羅を説得しようとしたが、加羅王は官家（みやけ）が置かれて以来、多沙津は加羅の津であり、その約束を破るのかと迫った。
　使者はこの場で扶余（くだら；百済）に与えるのは難しいと一旦退き、後日、録史（ふびと）を派遣して与えた。加羅は恨んで新羅と結び、新羅の女（むすめ）を娶った。ところが、従者が百人あり、彼等が諸県に配置され新羅の衣冠を着せるという事態に至った。これに怒った加羅の重臣（阿利斯等、ありしと）が使者を送り抗議すると、新羅は女を還せとし、加羅はすでに児があり今更できぬ、と紛争に発展し、加羅が国境の数城を抜いたという。
　政権は毛野臣を安羅に戻し、新たに高堂を設け、南加羅と喙己呑の原状復帰のため、新羅と百済に天皇の詔を聞かせるために使者を派遣せしめた。百済からは将軍等、新羅からは下級文官がやってきたが、彼等は堂の下に置かれたままとなり、事態は動かなかった。
　任那王とあるが加羅の重臣（阿利斯等）であろう、来朝し大伴金村を通じ、救援を要請した。政権は毛野臣に和解を進めるよう促し、毛野臣は熊川（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）に移り、百済王、新羅王に招集をかけたが、重臣を送るのみで王は動かなかった。毛野臣は怒り王を参加させるよう重臣を追い返した。新羅は一段上の重臣（伊叱夫礼智干岐、いしぶれちかんき）に三千の兵を率いさせた。
　毛野臣は馬山（久斯牟羅）の城に退り、新羅の伊叱夫礼智干岐は釜山付近（多多羅原）に滞留し、天皇の勅を聞かすよう迫った。新羅は此の地を抑え、日本（やまと）の援軍に備えたのであろう。毛野臣は三月を経ても王でなくば勅は伝えられぬと突っぱねた。これは毛野臣が伊叱夫礼智干岐を殺す機会を窺っているとの噂となり、伊叱夫礼智干岐は近辺の四村を略奪した。
　二十四年、日本人（やまとひと）と任那の人（ひと）の間の児の帰属をめぐり諍訟が絶えず、毛野臣は誓湯（うけいゆ）を行った。熱湯に投ずもので、偽りを述べれば爛（ただ）れるとするもので、爛れ死ぬ者が衆（おお）く、その行状が天皇にも聞こえた。天皇は使者を派遣して実状を調べさせた。毛野臣は使者（河内母樹馬飼首御狩、かふちのおものきのうまかひのおびとみかり）を送り、使命を果たして居らず使命を果たしてから帰国すると弁明した。天皇からの使者（調吉士、つきのきし）には一つの城の守備に当らせ、帰国させようとしなかった。加羅の重臣（阿利斯等）は切羽詰まり、新羅と百済に使者を派遣し、毛野臣討伐を求めた。両軍に対して毛野臣が城を固めて守ったため一月がたち、両軍は城を築くも進展なく、帰路に当る五城を抜くに終わった。
　ようやく天皇の使者（調吉士）は帰国することができ、実状を報告すると、毛野臣に召還命令が下され、毛野臣は帰国の途対馬で病死した。加羅、百済、新羅を和解させる命を受けた毛野臣は任那を騒乱せしめる結果となった。そして、二十五年（531年）に継体天皇は病で崩御された。
　当初半島派遣軍事力の中核であった葛城、吉備の勢力が国内的に粛正されてしまっており、半島での軍事プレゼンスが弱体化し、物部・大伴系は本国では実力を蓄えたものの半島には及ばす、任那の領土を維持できなくなっていた。任那内では新羅、高句麗と結ぶ者が実権を握り、新羅が磐井を抱き込むことも阻止できなかった。日本（やまと）が百済と新羅が対峙する高句麗と関係を持とうとしたことで、両国が結束することともなる。そして、任那を和解させるべく送り込んだ毛野臣が任那を混乱させてしまったまま、継体天皇が亡くなられた。

**国内の整備**
　勾大兄広国押武金日天皇（まがりおほえひろくにおしたけかなひのすめらみこと）安閑天皇（532を534年に変更～535年、2年間、[書紀巻18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki36.htm)）と武小広国押盾天皇（たけをひろくにおしたてのすめらみこと）宣化天皇（536年～539年）との世は大伴氏、物部氏、蘇我氏が国内体制を整備する時となった。
　屯倉と田部を拡張している。皇后や次妃の名をかりて、屯倉の地を定め、そこに働く豪族の耕作者を田部とし編入し、国別に割り振って出させ、応じる者を取り立て、応じぬ者を蹴落とすこととなった。税（たちから）の強化である。まず飛鳥の交通の要衝の小墾田、河内の桜井、摂津の難波に屯倉と田部を定めた。大和川、淀川水系の水上運輸、河内の馬飼いのネットワークによる内陸運輸を充実し、さらに瀬戸内海から西国筑紫へ、伊勢、尾張から東国武蔵へと進展させていった。
　二年(535年)五月条には筑紫国、豊国、火国、播磨国、備後国、婀娜国、阿波国、紀国、丹波国、近江国、尾張国、上毛野国、駿河国の屯倉に言及されている。八月には国々に犬養部（いぬかひべ）を置かせており、屯倉の警備に用いられたのであろう。九月には、桜井田部連（さくらゐのたべのむらじ）・県犬養連（あがたのいぬかひのむらじ）・難波吉士等（なにはのきしら）に詔して、屯倉の税（たちから）を主掌（つかさど）らしめている。
　武小広国押盾天皇（たけをひろくにおしたてのすめらみこと）宣化天皇の即位元年（536年）では、大伴金村大連、物部麁鹿火大連に加えて、蘇我稻目宿禰（そがのいなめのすくね）を大臣（おほおみ）、阿倍大麻呂臣（あへのおほまろのおみ）を大夫（まへつきみ）とする体制となる。
　那津に官家を造り、筑紫、肥、豊のみならず、茨田、尾張、新家、伊賀の屯倉から穀を集めせしめた。博多湾に注ぐ那珂川沿いの水運の便の良い地、津（港）の口（ほとり）に集結させた「阿蘇仍君（あそのきみ）【未だ詳（つばひらか）ならず】を遣（つかは）して、加（また）、河内国（かふちのくに）の茨田郡（まむたのこほり）の屯倉の穀（もみ）を運ばしむべし。蘇我大臣稻目宿禰は、尾張連を遣して、尾張国の屯倉の穀を運ばしむべし。物部大連麁鹿火は、新家連（にひのみのむらじ）を遣はして、新家屯倉の穀を運ばしむべし、阿倍臣は、伊賀臣（いがのおみ）を遣はして、伊賀国屯倉の穀を運ばしむべし」。
　「紀」では皇后の名を後々まで残すために屯倉・田部を定めた、それが地方に波及し、各豪族も生産に力が入り、豊作が続いた。那津に官家に集積したのは、「非常（おもひのほか）に備へて、永（ひたす）ら民（おほみたから）の命（いのち）とすべし。早く郡県（こほりこほり）に下（くだ）して、朕（わ）が心を知らしめよ」とのたまふ」としているが、磐井の乱後の半島を睨んでの兵糧の備蓄であろう。
　二年（537年）に、新羅に備えるために、大伴金村大連の二人の子、磐（いは）に筑紫を統治させ、狭手彦（さでひこ）を派遣し任那の安定を図り、百済を救わせたとある。聖王の七年（529年）に高句麗安臧王が百済北辺に侵略し百済は迎撃したが勝てず死者二千余人とあるが、八年前のことである。「十六年（538年）春に、都を泗沘に移す、一に所夫里（そふり）と名づく。国を南扶餘と号づく（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/131)）」とあり、百済は、熊津から南下して南扶餘（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）に都を遷したのであるが、三国史記においては、この時に高句麗に押し込まれた様子はない。高句麗は安原王七年（537年）、飢饉で国民が飢えたとあり、百済に侵攻する余裕はなく、逆に聖王十八年（540年）に、百済は高句麗の牛山城を攻撃している。狭手彦の派遣が百済で何を救援せしめたかは記されておらず、不明ではある。宣化天皇は四年（539年）に亡くなり、転機となった。
　天国排開広庭天皇（あめくにおしはらきひろにはのすめらみこと）欽明天皇の世では、大伴金村大連、蘇我稻目宿禰大臣は同じであるが、物部氏は麁鹿火が亡くなり別系統の尾輿が大連とされた。元年（540年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#元年（はじめのとし）春正月)）に、難波津から大和川を遡行する水運の最終地、海柘榴市など交易の市の立つ地に金刺宮を置かれた。金刺宮に、秦人、漢人等の渡来人を召し集め、国郡に配置せしめ、彼等から戸籍を造らせ（7053戸）、屯倉・田部の管理をするための人材育成を始めたのであろう、秦伴造（はだのとものみやつこ）を編成した。
　天皇は難波宮に行幸し、半島政策を再考された。大伴金村は高齢であり、継体政権での半島政策混迷の責任をとり、一線を退いた。許勢臣稲持（こせのおみいなもち）、物部大連尾輿等（もののべのおほむらじをこしら）が大伴大連金村を追い落しに回ったこともあるが、蘇我大臣稻目宿禰は二人の女（むすめ）を天皇の妃として送り込み皇子を得ており政争とは距離を置き、上手く立ち回っていた。

**混迷を深める任那**　欽明天皇二年四月（541.04、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#二年春三月)）に、任那の各地の王の重臣｛安羅の次旱岐（しかんき）夷呑奚（いとんけい）・大不孫（だいふそん）・久取柔利（くすぬり）、加羅の上首位（おこししゆゐ）古殿奚（こでんけい）、卒麻（そちま）の旱岐（かんき）、散半奚（さんはんげ）の旱岐の児、多羅の下旱岐（あるしかんき）夷他（いた）、斯二岐（しにき）の旱岐の児、子他（した）の旱岐｝、日本府（やまとのみこともち）の吉備臣等が百済に赴いた。聖明王から「任那を復興せよとの」天皇の詔を聞くという奇妙な事態を迎えていた。重臣等は意見を求められ、新羅が併合した卓淳（国論分断内応による）、己呑（攻め取られる）、南加羅（防備不足、同盟先なし）を返還するよう使者を送ったが返答が無い、天皇に使者を送り奏上したいが新羅が攻撃する恐れがあると聖明王に述べた。王は応えて、百済は肖古王、貴首王の時から任那の諸王と親交を結び共に興隆してきた。新羅に欺（あざむ）かれたのは己（聖明王）の過でもあった。新羅を国境まで徴召（め）すべく共に使者を送り天皇に奏上しよう、その間に新羅が任那を攻撃することあるなら救援する。かつて新羅は高句麗（広開土王）に救援を求め、百済、任那を攻撃したが克てなかった。新羅一国で任那を滅ぼすことはできない。我等が協力し、天皇の霊威あれば復興ができるとした。それぞれは進物を贈られ喜んで帰った。

　七月に百済は、安羅の日本府と新羅が通じていると聞き、安羅に使者を派遣し、新羅に通じている任那の執事（つかさ）、日本府の河内直（かふちのあたひ、百済本記では、加不至費直「かふちのあたひ」・阿賢移那斯「あけえなし」・佐魯麻都「さろまつ」等）を百済に召した。任那や百済には日本（やまと）と現地との混血児がこれらの役職に就いていた。百済が派遣した使者、前部（ぜんほう）奈率（なそち）鼻利莫古（びりまくこ）・奈率宣文（せんもん）・中部（ちうほう）奈率木刕眯淳（もくらまいじゅん）・紀臣（きのおみ）奈率（なそち）彌麻沙（みまさ）等のなかにも含まれていた。

　使者達は、河内直・阿賢移那斯・佐魯麻都に彼等の先の時代、そもそもの任那成立の経緯を思い起こさせ、新羅に誑（たば）かされるな、肖古王、貴首王の時に立帰れ、蜂や蛇の害、天災がその過ちを人々に悟らしめている。天皇の詔に従うべしと説得をした。聖明王も更に、河内直等に任那を失えば汝等も滅びる、任那が再興すれば汝等も栄える。新羅は任那を滅ぼすことで日本（やまと）から防衛しようとしている、甘言に乗れば、天皇を辱めることになる、よく戒（つつし）み、欺かれてはならないと釘を刺した。
　同月に、王は紀臣奈率彌麻沙と中部奈率己連（これん）を日本に派遣し、下韓（あるしからのくに、南加羅の南）の任那の政（まつりごと）について天皇に奏上した。四年（543年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#四年夏四月)）四月に彼等が帰国すると、聖明王は更に使者｛物部施德（もののべのせとく）麻奇牟（まきむ）等｝を派遣し、扶南（クメール）の財物などを献上した。
　11月に政権は津守連（つもりのむらじ）に天皇の詔書を托し百済に派遣した。「下韓に駐留する百済の郡令・城主を日本府に属せしめよ」とあり、任那は百済の棟梁（むねうつはり）でありこれが折れれば屋宇（家屋、百済）にならない。これを立て直せば河内直も自動的にお役御免になるという。

　聖明王は重臣（三佐平、内頭、諸臣）を集め、意見を求めた。彼等は百済の郡令・城主を日本府に出すべきでない、一方任那の再興を急ぐべしとした。更に十二月に群臣｛上佐平（そくさへい）沙宅己婁（さたくこる）・中佐平（しそさへい）木麻那（もくらまな）・下佐平（おとさへい）木尹貴（もくゐんくゐ）・徳率（とくそち）鼻利莫古（びりまくこ）・徳率東城道天（とうじやうだうてん）・徳率木淳（もくらまいじゅん）・徳率国雖多（こくすゐた）・奈率（なそち）燕比善那等（えんひぜんなら）｝を集め意見を求めた。重臣と同じ意見であり、日本府に河内直・阿賢移那斯・佐魯麻都等が居る以上、事は成りがたく、彼等を除くことで任那を立て直すべしとし、任那の代表者を招集し同意を得てその旨を天皇に奏上すべきとなった。使者（施德高分、せとくかうぶん）を派遣して任那の執事と日本府の執事を招集し、聖明王の意向を伝えようとした。
　五年正月（544年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#五年春正月)）に任那の執事と日本府の執事に招集をかけたが、祭祀があり終わるまで難しいということで来ず、再度招集をかけるも、執事ではなく下級の者が遣わされ意味をなさなかった。仕方なく二月に任那と日本府の執事に使者｛施徳（せとく）馬武（めむ）・施徳高分屋（かうぶんをく）・施徳斯那奴次酒等（しなのししゆら）｝を派遣し、日本（やまと）から帰国した使者が得た天皇の詔の趣旨を伝え、天皇の詔書を津守連｛百済本記では津守連己麻奴跪（こまなこ）｝が携え百済に来訪するに至る経緯を説明し、三月十日に我等の見解を天皇に奏上する使者を立てる予定であり、即刻招集に応じ、天皇の詔を聴くようにと催促せしめた。
　特に、河内直等｛河内直・移那斯（えなし）・麻都（まつ）｝には、汝の先祖｛おや、百済本記では、那干陀甲背（なかんだかふはい）・加猟直岐甲背（からふぢきかふはい）・那奇陀甲背（ながだかふはい）・鷹奇岐弥（ようがきみ）、爲哥可君（ゐかのきみ）有非岐（うひき）｝の時より新羅の言を信じ、国に難をもたらし、任那を損なってきた。招集に応じなければ汝等を任那から去らすよう天皇に奏上する。招集に応じて天皇の詔を聴くようにと迫った。任那の執事等には、天皇に任那を再興するための将兵の派遣を求め、彼等の食糧は百済で準備するつもりであり、その成否を論じるため、即刻招集に応じることを求めた。
　意外な答えが日本府卿（やまとのみこともちのかみ）から返ってきた。我等は我等で使者を立て天皇の意向を伺ったところ、天皇は新羅に印奇臣（いがのおみ）を派遣し、百済に津守連を派遣するつもりであり、その際には我等は新羅にも百済にも行くなとのことであった。新羅に向かう印奇臣を追って、天皇の意向を伺うと、日本（やまと）の臣と任那の執事は新羅に行き天皇の勅を聴けというものであり、百済にゆけということはなかった。津守連が百済に向かう途上にも伺ったが、下韓の駐留する百済の郡令・城主を日本府に属せしめよということのみであり、百済に行けということはなかった、という。任那の旱岐等は日本府の卿が行くなとしたためで、我等は聖明王の配慮を喜んでいると述べた。
　三月に百済は使者｛奈率（なそち）阿得文（あとくとくもん）・許勢奈率奇麻（がま）・物部奈率奇非等（がひら）｝を派遣して天皇の詔を確認し、日本府に再度指示の徹底を求めた。当時使者の得た詔は、「百済が日本府と共に任那を再興せよ、新羅に誑かされるな」ということであり、津守連から聴く詔も同じであり、日本府｛的臣（いくはのおみ）、百済本記では烏胡跛臣（うごはのおみ）｝と任那を招集したが、祭祀を理由に延期し、下級の者を寄越すに過ぎず、事が進まなかった。これは、日本府の的臣・吉備臣・河内直等が（安羅に居る）阿賢移那斯（あけえなし）・佐魯麻都（さろまつ）により牛耳られているからである。彼等は津守連等を留めて、天皇への報告をさせず、別途天皇に使者を派遣している。任那の兄が安羅であるが、安羅にとって日本府は天（百済本記では任那の父が安羅、安羅の本が日本府）であるに、逆転して日本府が阿賢移那斯・佐魯麻都に従っている。この二人を放逐し、日本府に百済と協力して任那を復興するよう図っていただきたい、と。
　しかし、日本（やまと）側は百済に懸念があった。昔、印支弥（いきみ）と阿鹵旱岐（あろのかんき）の時、新羅に攻められ耕作ができなくなったとき、百済は遠くて急には救援に来ず、やむなく的臣等が新羅に行き交渉をして耕作できるようにしたと聞いている。天皇の意向は新羅と関係を結ばせることではない。百済が任那を再興しておれば、的臣等や阿賢移那斯・佐魯麻都が新羅と関係をもつこともない、と使者等に応じると、使者等は天皇の意向が新羅に誑かされるなという点で聖明王と一致するとし、また、こう反論した。
　現地では新羅が㖨淳（とくじゅん）を取り百済の守備兵を久礼山から追い出し、そこで耕作を始め、安羅に近い処は安羅が耕作する均衡が保たれることとなった。しかし、移那斯・麻都等がそこに割って入り耕作したかと思うと逃げ出し、日本府の臣（印支弥そして許勢臣）がやってきた。その時新羅に攻められたが、耕作できないということはなかった。新羅は時々に攻める準備はしていたが、百済はそれに応じて将士を出し防衛をしてきたため、新羅は攻めることは出来なかった。それを百済は遠く救援ができなく、的臣等が新羅と交渉して耕作を可能にしたというのは偽りである。移那斯・麻都等は新羅の礼冠を付け、その服装をして国境を越えている。㖨淳が滅びたのもそのような内応による。
　使者等は彼等を放逐し任那の安定を取り戻すことを天皇に訴えた。彼等は十月に帰国したが、日本（やまと）側は、彼等の放逐に関しては応じなかった。
　十一月に百済は、日本府の臣（吉備臣）と任那の執事｛安羅の下旱岐大不孫（だいふそん）・久取柔利（くすぬり）・加羅上首位古殿奚（こでんけい）・卒麻君（そちまのきし）・斯二岐君（しにきのきし）・散半奚君（さんはんげのきし）の児・多羅の二首位訖乾智（こちげんち）・子他（した）の旱岐・久嵯（こさ）の旱岐｝を招集した。日本（やまと）に派遣した使者（奈率阿得文・許勢奈率奇麻・物部奈率奇非等、）が天皇から得た詔は『早く任那を建てよ』、津守連に托した詔を実施しているかということであった。各々の意向はどうかと彼等に問うと、彼等は聖明王に従うとし、その方策を問うた。
　聖明王は安羅と新羅の間の洛東江に六城を築き、天皇に三千の兵を求め、各城に五百の兵と百済の兵を配し、新羅がそこで耕作するのを煩わせば、久礼山の五城から彼等は撤退しよう。また、下韓に駐留する百済の郡令・城主は新羅の更なる南下を食い止める欠かせない。ただこれを実施するには、吉備臣・河内直・移那斯・麻都の四人を任那から放逐してもらわねば、成り難い。天皇に此の事を奏上する使者を日本府の臣と任那の旱岐と共に派遣し、その詔を得るべし、と応じた。
　任那の旱岐が同意するのは分かるが、奇妙なことに、当の吉備臣も「愚（わ）が情（こころ）に協（かな）へり」とある。日本府の大臣、安羅・加羅の王に伝え、天皇に使者を派遣し、奏上する。「『此（これ）誠に千載（ちとせ）に一会（ひとたび）の期（ちぎり）、深く思ひ熟（うま）く計（はか）らかざるべけむや』といふ。」とあるも、ここで途切れ、これが如何なる結果になったかは記されていない。

**任那日本府の孤立**
　この後、欽明天皇六年（545年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki37.htm#六年春三月)）百済は任那の日本府の臣、諸の旱岐等に南朝（梁）の財を贈与している。天皇には丈六の仏像を造ったとある。是歳に、高句麗では細群（小夫人の舅）と麁群（中夫人の舅）が宮門で戦い国が乱れ、細群がことごとく殺され、香岡上王(安原王）が亡くなっている（百済本記による。香岡上王の正夫人に子なく、香岡上王が病死すると後継者争いとなり、麁群の子、八歳が王位についた。三国史記に後継者争いの記述はない）。
　欽明天皇八年（547年）になると百済から軍事支援の要請があった。九年（548年）には、百済の使者から、高句麗が馬津城（ましんのさし）を囲んだが、これは安羅国と日本府の招来したことによるとの訴えがあった。安羅国と日本府に確認をしたが返答がない。派兵を要請したが、彼等に用いられる恐れがあり、一旦停止していただきたいという。天皇は、高句麗に密使を送ることはない、協力して任那を再興する方針に変更は無い。逃亡して空になった処には兵を送る、と伝えるよう詔し、冬に城を守る370の兵を百済に派遣した。
　十年（549年）使者が百済に帰るに際し、天皇は移那斯・麻都が高句麗に密使を送ったかを正す、軍の派遣は停止すると伝えた。十一年（550年）には矢三十具（1具50本）、十二年(551年)には麦種一千斛（ちさか；十升が一斗、十斗が斛、1升は4合強で400斛、斛は石に等しい）を援助した。
　しかし事態は妙な展開をみせていた、十一年聖明王は移那斯・麻都の事はもうどうでもよいとし、高句麗の奴や捕虜を献上してきた。十二年には、聖明王が新羅と任那を率いて漢城を得、平城にまで攻め込んだとある。
　三国史記では、聖明王三年（525年）に新羅と国交を結んだ（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/131)）、七年（529年）高句麗に穴城を攻められ五谷の原で迎撃したが死者二千人余の敗戦となった。十八年（540年）には、高句麗の牛山城を攻撃させたが克てなかった。二十六年（548年）には高句麗平成（陽原王）が濊（わい）と謀り漢江の北の独山城（馬津城とみられる）を攻撃し、聖明王は新羅に救援を求め、新羅は甲兵三千人で救援し、高句麗軍を破ったとある。二十八年（550年）には、高句麗の道薩城（忠清北道槐山郡）を攻め落としたが、逆に百済の金峴城（忠清北道鎮川郡）を包囲された。しかし、三十一年（553年）には双方が疲弊したところを新羅が百済東方の辺境（道薩城・金峴城方面）を取り、新州を置いた。百済は王女を新羅に嫁がせたとある。
　三国史記からすれば、百済は高句麗の南下への対応が急務であり、新羅と国交を結び、救援を求めているとなる。「紀」を加味すれば、百済は南部と東部に当る任那の譲渡を日本（やまと）に求め、一方、天皇の政権が日本府を通じ高句麗と連携しているのではないかと疑っており、その連携を断つために、日本府が新羅に操られていると工作し、排斥を狙っている様相となる。その高句麗との戦いで消耗したところ、新羅から攻撃をされ、王女を嫁がせる（臣従する）事態となった。そして、
　欽明天皇十三年（552年）五月、百済、加羅、安羅は使者｛中部（ちうほう）徳率（とくそち）木刕今敦（もくらこむとん）・河内部阿斯比多（かふちべのあしひた）等｝を送り、高句麗と新羅が謀り、百済と任那を滅ぼそうとしているとして援軍を求めてきた。

　ところが「紀」では、それをはぐらかしたような展開で、仏教にかかわる動向を記している。十月聖明王は使者に釈迦仏の金銅像一躰（かねのみかたひとはしら）・幡蓋若干（はたきぬがさそこら）・経論若干巻（きやうろんそこらのまき）を献上させた。天竺から三韓に伝わる釈迦の法は周公・孔子も知らなかった無上のもので、これによれば、心のおもいのままにすべて成就される法であり、更に東に伝わるとされ、畿内でもお広めいただきたいとあった。「紀」では「如意」というが殺し文句であり、天皇は、素晴らしいと思うが聞いたことが無いので、群臣に意見を求めた。
　蘇我大臣稲目宿禰は、西方の国々すべてが敬っておられるので我国のみ背くことはないと応じた。物部大連尾輿と中臣連鎌子（かまこ）は、国神が怒る、「蕃神（あたしくにのかみ）を拜（をが）みたまはば、恐（おそ）るらくは国神（くにつかみ）の怒を致（いた）したまはむ」と応じた。天皇はどうなるか試してみようと稲目に預けて礼拝させた。ところが疫病が起こった、「国に疫気（えやみ）行（おこ）りて、民（おほみたから）夭殘（あからしまにしぬること）を致す。久（ひさ）にして愈（いよいよ）多（おほ）し。治（をさ）め療（いや）すこと能はず」に至り、仏像を川に流し、伽藍に火をつけると風も無いのにあっというまに焼け落ちた。「如意」とは逆の結果となり、百済は平壌も漢城からも撤退し、新羅が漢城及びその北方にも入り込んだ。
　任那は翻弄されてきた。継体政権は遠い縁戚からの即位であり国内基盤を固めることが先決となった。このため半島では現地で事態が動き出し、九州で新羅が後押しする磐井の乱を招き、半島での統制が利かないことが露呈した。南下を余儀なくされた百済に任那の割譲を求められ応じてしまった。任那はこれに危機感を抱き、日本府も継体政権をあてに出来なくなり、情勢の変化に応じて、新羅、高句麗、百済との連携を模索したようである。
　欽明政権では表向きは百済聖明王を立てて任那を再興することを基本としているが、新羅、高句麗との交易は継続していたようである。百済系のみならず新羅系、高句麗系の帰化人もおり、それを支える豪族もおり、漢化政策や仏教導入で国力を増す三韓のありようを注視していた。
　「紀」からすれば、新羅、高句麗にも使者を派遣しており、文物も入ってきている。国内では仏教導入を廻って、百済との交易の利を蓄える蘇我氏と伝統を重んじる物部氏・中臣氏が中核的な勢力となってゆく。
　百済の南下に病む任那にあって、百済の行動を日本（やまと）が牽制するどころか加担するのであり、古くから任那を維持してきた日本府の面々としては、割譲される地域の任那の声に応えるに、新羅あるいは高句麗と謀り百済を牽制する他なかったのであろう。高句麗の南下が新羅あるいは百済に脅威となれば、新羅と百済は相互に援軍を派遣しており、任那もこれに加わることを余儀なくされ、日本府も同調せざるをえなかった。百済が高句麗の平壌まで攻め込み、漢城を回復すれば、日本（やまと）の援軍ともどもこれを支持しよう。しかし、百済と高句麗の双方が疲弊し、新羅がその隙間を占拠すれば、任那にとっては新羅の脅威が増す一方、その意向を無視することは出来なくなった。
　この激動に欽明政権は聖明王任せであり、日本府は本国からの確乎たる軍事支援もなく、新羅や高句麗とも連携を図る移那斯・麻都等の動きに引きずられることとなったと思われる。その経緯については三国史記には記載がない。「紀」の記述を辿ってみよう。

**任那の滅亡**
　欽明天皇十四年（553年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki38.htm)）正月に、百済から使者があり援軍を求めてきた。しかるに五月に和泉灘の海中から梵音が雷のごとく響き渡り、光る樟木（くすのき）が浮かんでおり、天皇がこれで仏像を造らせたという。六月に良馬二疋・同船二隻・弓五十張・箭五十具を百済に送り、医博士、易博士、暦博士等の交代、卜書、暦本、種種藥物の送附を求めている。
　八月百済は春草が雨を待つように、正月に派兵を乞う使者を送った。それを新羅と高句麗は示し合わせて、日本（やまと）に使者を送るは、新羅と高句麗を討つつもりであろう、ならば百済を滅ぼす、まずは日本（やまと）の援軍を止めるために安羅を討ち取ると云ってきた。即刻派兵を頂かねば、取り返しのつかぬことになる。衣糧は百済が用意する。不幸にして的臣は亡くなった。速やかに代りを派遣いただき、不足する弓馬も援助いただきたいと述べた。
　十月聖明王の子、血の気の多い余昌（よしやう）が百合野（黄海北道の平原）で高句麗と対峙し、高麗の王を東聖山（平壌東北）に追い詰めたとある（上記三国史記の記述では、百済・高句麗の双方は疲弊し、百済の東方が新羅に併合されており、百済に平壌まで進出する余裕はないはず）。高句麗をかほど追い詰めることができ、高句麗の脅威に派兵を要請する状況は理解に苦しむところではある。余昌には戦を好み独断専行の癖ありとするニュアンスがある。
　十五年（554年）正月に百済から使者が訪れる。昨年十一月にはこの正月に代りの内臣を派遣するということであったが、派遣されたのかどうか？また軍勢は如何程か？軍営を準備する都合がある。正月中に準備いただきたい、と催促をした。内臣（佐伯連）は勅（「即ち助の軍の数一千、馬一百匹、船四十隻を遣らしめむ」）を得た。二月に百済は、人事の交代等を実施した（徳率東城子莫古を貢りて、前の番奈率東城子言に代ふ。五経博士王柳貴を固德馬丁安に代ふ。僧曇慧等九人を僧道深等七人に代ふ。別に勅を奉りて、易博士施徳王道良、暦博士固徳王保孫、医博士奈率王有悛陀、採藥師施徳潘量豐、固徳丁有陀、楽人施徳三斤、季徳己麻次、季徳進奴、対徳進陀を貢る）。五月に内臣は舟師を率い百済に到着した。
　百済は十二月九日に新羅に併合された東方の城（函山城）を攻め、夕刻に落とし、早船で日本（やまと）に急使を送った。相手が新羅のみであればこの軍で足りるが高句麗もあり、筑紫の軍を派遣いただきたい、万人を以て任那も助けたい、と礼物・高句麗の捕虜を献上し、申し入れた。
　余昌は新羅に攻め込もうとするが、老臣等は諫めた、今はその時ではない、反って災禍を招くと。余昌は無視して新羅に攻め入ったものの、長く苦戦が続き、寝食もままならず、聖明王自ら慰労するため出陣する。これを察知した新羅は国中の兵を挙げて、これを攻撃した。聖明王は新羅の馬飼の手により討たれ亡くなった。余昌も包囲されて危うい状況にあったが、筑紫の国造等が雨のごとく矢を射かけて、逃げ戻る事が出来た。新羅はこの機に一挙に百済を滅ぼそうとしたが、ある将軍が「天皇は任那の事で新羅を責めており、百済を滅ぼせば後の患となる」と諫め、やめたとある。
　十六年（555年）余昌は弟の王子（せしむ）恵（くゑい）を派遣し聖明王の死を伝えた。許勢臣（こせのおみ）は恵に日本（やまと）に残る気があるかを尋ねた。恵は援軍を以て父の雪辱を果たしたいが天皇の命に従うと応（こた）えた。蘇我臣は聖明王の過ちとは何で、今後の百済をどのように立て直すかを問うた。恵は、自分はその器でないとし、逆にどうすればよいかを問うた。蘇我臣は日本（やまと）の神「天地割（さ）け判（わか）れし代（よ）、草木言語（くさきものがたり）せし時に、自天降來（あまくだ）りまして、国家（くに）を造り立てし神」を祭祀することを怠った過ちを悔いて、神霊を祭祀すれば国が栄えるとした。
　八月余昌は臣下に父の為に出家して道を修めたいと問うた。臣下は新羅、高句麗に滅ばされないために前の過ちを繰り返さないことが肝心であり、聖明王の為の出家は民から撰べばよいと応えた。臣下は百人を出家させ、丁重に修道させた。
　十七年（556年）正月に恵は帰国することとなり、阿倍臣、佐伯連、播磨直を派遣し、筑紫国の舟師を率い、筑紫君の子が勇士千人を以て海路の要衝を警備した。十八年（557年）三月に余昌が即位｛威德王（ゐとくわう）｝した。
　この間日本（やまと）では、大臣蘇我稲目は穂積臣（ほづみのおみ）と共に屯倉の設置・田令（田の監理者）の任命を進めていた。備前の児嶋郡、倭の高市郡、紀の海部郡の設置し、高句麗人や百済人を田令に就けた。屯倉に於ける収穫や使用人の管理に漢化政策に早かった高句麗や百済からの韓人を用いた。帳簿（計帳・戸籍）を導入し集計することで国の財政を把握することを蘇我氏が主導したのであろう。児嶋では、葛城山田直（かづらきやまだのあたひ）瑞子（みつこ）を田令に置いた。
　しかし、経験に乏しい瑞子では、婚姻や出生死亡、兵役など変動する田部での人や物の管理には難があったようである。稲目は百済王族の帰化人王辰爾（わうじんに）を船史（ふねのおびと）として船の賦（みつき）の帳簿管理をさせていたのであるが、三十年（569年）には、王辰爾の甥の胆津（いつ）を吉備の屯倉の田部に派遣し、丁（よほろ）の籍（ふみた）を整備させ、これを成し遂げた胆津を田令とし、葛城山田直瑞子を副とすることになる。児嶋の白猪（しらゐ）の屯倉の田部のことであり、胆津は白猪史（しらゐのふびと）の姓（かばね）を得ている。史（ふびと）は文書管理の職とされがちであるが、それには人と物を管理するシステムを導入する必要があり、試行錯誤が繰り返されたのであろう。
　二十一年（560年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki38.htm#廿一年秋九月)）九月に新羅から調賦（みつきもの）を持参する使者が派遣された。捕縛され殺されることも想定され、人質にも価しない身分、冠位奈末（なま、17階の11）の者であった。どういうことか日本（やまと）側は、通常より厚遇した。使者は帰国して、使者として相応しい身分の者を送らねば国を卑下することになると報告した。翌年には新羅は及伐干（きふばつかん、17階の9）身分の使者を立てた。今回は平常に劣る扱いであり、怒って使者が帰国した。持ち帰った調賦を大舎（ださ、17階の12）の身分の使者に託した。難波に着くと百済の下に列せられそうになり、穴門（長門）に引き返した。穴門には穴門館（むろつみ）があり、使者が如何なる館であるかを問うと、「西の方礼（ゐや）無きことを問ひに遣（つかは）す使者の停（とどま）り宿る処（ところ）なり」と云われた。帰国してそのことを報告すると、新羅は阿羅波斯山に城を築いて日本（やまと）に備えた。阿羅は安羅とみられ、すでに新羅は安羅に進出していたようである。
　二十三年(562年)正月には、新羅が任那の官家（みやけ）を滅ぼしていた（二十一年という一書もあると記されている）。任那というのは十国｛加羅（から）国、安羅（あら）国、斯二岐（しにき）国、多羅（たら）国、卒麻（さちま）国、古嵯（こさ）国、子他（した）国、散半下（さんはんげ）国、乞飡（こちさん）国、稔礼（にむれ）国｝の総称とある。官家は半島に於ける屯田、屯倉のごときであり、実態は分からないものの半島に於ける日本府を経済的、軍事的に維持するシステムであったと思われる。新羅は南加羅（ありしひのから）から安羅を押さえ、日本（やまと）からの援軍の上陸を阻止する布陣をして、任那の旱岐等に圧力をかけたのであろう。
　六月には、詔「新羅は西羌（にしのひな）の小（すこ）しき醜（いや）しきくになり。天（あめ）に逆（さか）ひて無状（あぢきな）し。我が恩義（めぐみのことわり）に違（たが）ひて、我が官家を破る。我が黎民（おほみたから）を毒（をや）し害（やぶ）り、我が郡県（くにこほり）を誅（ほろぼ）し残（そこな）ふ・・・」が発せられた。七月に到着した新羅の使者は、新羅が任那を滅ぼしたことを知り、それを恥じて役目を放棄し、本国に帰らず河内に住んだという。国内には伝統的に新羅と関係する豪族もおり、新羅系の移住者もいた。
　日本（やまと）では、蘇我氏系の大将紀男麻呂（をまろ）宿禰、副将河辺臣瓊缶（にへ）を派遣する。安羅方面（洛東江）は新羅に封鎖されており、蟾津江方面から上陸し、哆唎に至り、現地の薦集部首（こもつめべのおびと）登弭（とみ）を派遣して百済側と連携を図った。登弭は帰路妻の家に泊まるのであるが、途中印書と弓箭を落し、新羅側に知られ攻撃されたが、なんとか百済軍営に入ることができたとある。
　瓊缶は軍を引き締め、新羅を攻撃し、奮戦したのであろう新羅が白旗を掲げてきた。しかし、瓊缶はその意味を覚らず、己も単独白旗を掲げ進んだ。これを新羅は降伏とみなし、攻撃を加え、瓊缶は撤退せざるを得なかった。これに士卒は瓊缶を見捨てたとあり、瓊缶とその婦等は生け捕りにされてしまった。瓊缶は命と引き換えに婦を差出したことで、婦等は陵辱を受ける悲惨を味わった。
　ここで記述が終わっており、任那の回復は不発に終わったとなるのであろうが、奇妙な展開となる。八月に、大将軍大伴連狹手彦（さでひこ）に数万の兵で、百済と連携して高句麗を討たせたとある。新羅でのかくなる敗北を喫しながら、高句麗を撃ち破り、高句麗王が逃げ出した宮の財宝と美女等を持ち帰ったとある（一本｛あるふみ｝に曰くで十一年｛550年百済が高句麗の道薩城を攻めた時｝としている）。562年の高句麗では平原王の四年であり、「陳の文帝が詔して王に寧東将軍を授く[（国会図書館）](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/100)」とあるのみで該当する記述はない。百済本紀では威徳王八年（561年、[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/132)）に、「秋七月兵を遣り、新羅との境を侵掠す。新羅の兵出撃し之を敗る。死者一千余人」とあり、手痛い敗北を喫しており、高句麗と戦える状況ではない。
　十一月に新羅からの使者があったが、この使者も新羅が任那を滅ぼしたことへの天皇の憤りを知り、本国にも帰らず、摂津の三嶋郡に住みついたとある。
　三十二年（571年）に欽明天皇は、太子に「朕（われ）、疾甚（やまひおも）し。後（のち）の事を以（も）て汝（いまし）に属（つ）く。汝、新羅を打（う）ちて、任那を封（よさ）し建つべし。更（また）夫婦（をうとめ）と造（な）りて、惟（これ）旧日（もと）の如くならば、死（みまか）るとも恨（うら）むること無けむ」と言葉を残して崩御された。
　本来なら、ここで所謂任那は新羅と百済に併合される過程に入り、日本府が終わるのであるが、何故か高句麗に関する記述が続く。

**高句麗のこと**
　二十六年(565年、[書紀巻19](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki38.htm#廿六年夏五月))に、高句麗から筑紫に集団で帰化し、山背（宇治の旧巨椋池辺り）に入ったとあり、三十一年（570年）にも高句麗からの使者について言及しており、山背国相楽郡に館（むろつみ）を設け厚遇しており、政権としては新羅に圧力をかける意味でも高句麗との関係を深めたのかも知れない。
　高句麗の使者はかつての敦賀ルートを辿ったが風浪で「越」に漂着した。瀬戸内海は潮流や海賊の為に航行に難がありかつては敦賀ルートが主であり、由良川や円山川、あるいは琵琶湖を経由して畿内と往来をしてきた。
　「越」は古くは対馬海流を経由して中国の「越国」から戦乱を逃れた民が到達した地でもあり、その文化・技術を持ち込んだとされる。出雲国風土記の神門（かむど）郡古志（こし）郷では、伊弉那彌（いざなみ）命の時に、「古志国の国人等、到来して堤を為（つく）り」とあり、古くから往来して土木工事で国造りを援助していた。出雲からの製品も「越」に流れ込んでおり、日本海側での往来は盛んであった。高句麗が日本（やまと）に至るには、日本海側の敦賀ルートを用いるのは自然ななりゆきであったろう。
　「紀」では越には道君（みちのきみ）がおり、高句麗の使者に対して己を天皇と偽っていたとある。「越」にはそれを感じさせる趣があった。敦賀には気比神社があり、主神は伊奢沙別命（いざさわけのみこと）であるが、元来の名は御食（みけ）の神で「ほむた、立派な稲田」であったが、誉田天皇（ほむたのすめらみこと、応神天皇）に名を譲り、そのことを神功皇后、武内宿禰が寿（ことほ）ぎ酒宴を設け大変喜んだとある。また、男大迹王（継体天皇）は近江国高島郷三尾野の生まれであるが、幼く父を亡くし母の里、越前国高向で生育されていた。武烈天皇に後嗣がなく、応神天皇の五世の子孫であることで男大迹王が後嗣にされ、天皇に即位されており、この地は皇室と因縁の深い由緒ある地となっていた。
　高句麗の使者は、朝廷の派遣した膳臣（かしはでのおみ）が朝廷の大使であることに気づき、道君に調（みつき）の返還を求めたとある（敏達天皇の元年、使者等の帰国に際し、大使が副使等に騙されたことの過失が本国で問われると述べたことで、使者等が大使を殺す事件が起こる。事件の調査に対して、副使等は天皇が大使に妻を賜うたのを断る非礼を為したためとして帰国した。二年にも高句麗からの使者が越に漂着し、これを高句麗に送還せしめたが、荒波に航海することを恐れ、使者等を海に投げ入れ、鯨に襲われたと報告し、それが露見して罰せられた。三年に高句麗から使者が訪れ、使者が帰ってこないことを問われ、使者を殺したことは天皇の命に背いたこと、また、殺害した二つの罪で厳しく処分したとして終わっている。高句麗との交渉は不調に終わることになる）。
　この使者を琵琶湖北岸（塩津）に迎えるため、難波から淀川を遡り、宇治川から山科川を北上し、逢坂山を山越えし、大津から塩津に向かったようである。逢坂山はいわゆる船通山となり、巨石を運搬するように船ごと運搬して向かったようである。
　逆を辿り、宇治川からは木津川を経由して相楽館に招き入れている。瀬田川は使われなかった。古代はどうであったか分からないが現状では瀬田大橋辺りの標高がおよそ85ｍ、大石辺りで75ｍ、天ヶ瀬ダム下で30ｍ、宇治橋辺りで18ｍくらいと落差が大きく、後には、大石から陸路で木津川に向かうルートもとられており、瀬田川を下るには難があった。貴重な使者であり文物も携えており、安全なルートが選択されていよう。いずれにせよ、外交ルートとして、敦賀から琵琶湖、木津川経由が再確認されたことであろう。
　仏教文化は百済から導入されたというのが「紀」における記述であるが、高句麗は小獣林王（在位:371年 - 384年）の頃から前秦より漢文化、儒学や仏教を取り込んでおり、以降、宋、北魏に朝貢を重ねており、その受容に関しては半島では一等進んでいた。日本（やまと）政権の中にも高句麗との関係を重視する勢力がいた。これが実を結ぶのは推古天皇の世になってからのことである。
　推古天皇三年（595年、[書紀巻22](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki41.htm#三年夏四月)）に高句麗の僧恵慈（えじ）の来朝があり、厩戸皇子（聖徳太子）の師となり、その薫陶を得た太子が仏教に対する深い理解を示したとある。太子は『法華経』・『勝鬘経』・『維摩経』に関する『三経義疏』を著すに至り、恵慈がこれを半島のみならず大陸にまで広めることになった。

**振り返って**（付録）
　日本人は「紀」により任那をみる。「紀」の編者達は「百済記」、「百済新撰」、「百済本記」を引用している。この三書の内容や成立時期、引用に際しての問題点に関しては、「『日本書紀』編纂史料としての百済三書」（仁藤敦史 国立歴史民俗博物館研究報告、[HP](https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/ronbun/ronbun8/pdf/194007.pdf)）」に詳しく、ここでは省きたい。
　半島自身による記録は、百済では近肖古王の三十年（375年）に漢人による「古記」の編纂に始まる。高句麗では嬰陽（えいよう）王十一年（600年)条に「古史（留記）」を「新集」として隋に提出しており、小獣林（しょうじゅうりん）王の時に大学（372年）を建て律令を頒布（373年）しており、留記の編纂も始まっていよう。新羅では両国に比べてかなり遅れ史書としては不祥であるが、真興（しんこう）王の六年（545年）に「国史は君臣の善悪を記し」云々とあり、この頃にはすでに編纂されていよう。これ等は「紀」には引用がなく、編者達が目にしたかも不明である。現存しないため逸文以外には照合はできない。
　「記紀」の編者達は、過去について、中国の史書を見る事が出来た。「紀」の記述には史書からのさまざまな引用があり、渡来の博士の指南もあり、その内容を学習する者がおられた。しかし、天地開闢以来の万世一系の記録が「記紀」の本意であり、それに反する奴国や邪馬台国の歴史は葬られ、中国への臣従を明らかにする恐れのある朝貢の記録も省かれた。そのために、奴国や邪馬台国、倭の五王の執った半島、大陸に対する政策が「記紀」ではみえなくなってしまった。
　半島の歴史について現存する最古としてものとしては、高麗（こうらい）17代仁宗（じんそう）の命を受けて金富軾（きんふしょく）が撰した三国史記（1143～1145に編纂）がある。いわば、鎌倉時代の幕府で重きをなした平安貴族の末裔が、幕府の命で、幕府の歴史ではなく、「記紀」を編纂するような特殊なもので、編纂の動機が天武天皇の時の編者とは当然異なることになる。
　したがって、金富軾の動機をみておく必要がある。仁宗の世、中国の五経や諸子百家や史書に通じる者が増えたものの、新羅、高句麗、百済の歴史については、古記などではその事蹟が中国の史書のように明らかでない。それを明らかにする、ということであり、高麗建国以前の朝鮮の三国の歴史を明らかにするという。
「今の学士大夫、其れ五経・諸子の書、秦漢史書、歴代の之史に於て、或は淹（ひろ）く通じ詳説の者有るも、吾邦の事に至るに於ては、却って茫然として其の始末を知らず。 甚だ嘆く可きなり。況（いわん）や惟（こ）れ新羅氏、高句麗氏、百済氏、開基し鼎峙す（建国し相対立す）。能く礼を以て中国に通ず。故に范曄（はんよう）の漢書。宋祁（そうき）の唐書、皆て列伝に有り。而るに詳内略外（中国国内には詳しく国外は粗略）にして、以て（三国のことを）具（つぶさ）に載せず。又、其の古記、文字は蕪茁（粗雑で乱立）し、事跡が闕亡（欠乏）せり。是を以て君后の善悪、臣下の忠邪、邦業の安危、人民の理乱、皆て発露を得ずして以て垂れる（進三国史記表、朝鮮神話に見る女神の原像、北島　由紀子、[HP](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1807134/scs0045.pdf)）」とある。
　金富軾は自身が新羅武烈（ぶれつ）王（在位：654年 - 661年）を祖とする慶州貴族の出身であり、新羅は高麗に滅ぼされたのであるが、両者には深いつながりがあるとしている。
　新羅末56代敬順（けいじゅん）王は、戦により国民を塗炭の苦しみに陥れることを避け、高麗の太祖（王建、おうけん）に降伏した。太祖は国家をそのまま与えたことを喜び、王を厚遇し、長女を王の妻とし、敬順王を正承公として太子の上位に除し、新羅の王都を慶州と改め王の食邑とした。これは、その前に王が、伯父の娘を太祖に薦め、太祖が娶ったことも関連していた。その娘の生んだ子が高麗第八代の顕宗（けんそう）の亡父で安奈という。また、高麗第五代の景宗（けいそう）が正承公の娘を王妃としたとも記している。金富軾が高麗に受け継がれている新羅の伝統を強く意識し、三国のなかでも新羅を中心とする三国史記を編纂することに、強い意欲をもって臨んだとみられる。
　彼は22歳で科挙に合格し、1116年に宋に使臣として派遣され、中国の史書を贈呈され、また、宋学の興隆を目の当たりにし、いつか匹敵する史書を編纂せんと志したのでしょう。彼は、妙清（高麗独自の皇帝と年号を制定すべしとする西京｛平壌｝の国学派）の乱にあっては王党派（宋との関係、儒学を重視する開京｛開城｝の保守派）の旗頭として三軍を指揮し反乱軍を鎮圧した武の人でもあった。官職を辞して後、王の11人の書紀官を束ね、史書編纂の総責任者に就任している。
　彼は儒家であり、「鬼神を敬して之を遠ざく」を旨としており、新羅の始祖が卵から生れた、天から金の樻（はこ）で降臨したという伝承を記してはいるが、信じ難いとした。その始まりは中国にあるとしている。中国の皇帝の娘が夫なしで子を孕み、人ではないとして海に浮かべると辰韓に辿り着き、子を生んだ。その子が海東（朝鮮）の始祖王とし、その王の娘は地仙であったし、宋が東神聖母として祭祀しているとする説を導入している。
「我が朝（高麗）、尚書の李資諒（）りしりょう」宋に入り朝貢す。臣、富軾、文翰（書記）の任を以て輔行す。佑神館に詣で、一（ある）堂に女仙像の設けらるを見る。館伴（接待官）の学士の王黼（おうほ）曰く、此、貴国の神、公等は之を知るや？遂に言いて曰く、古（いにしえ）帝室の女（むすめ）有り、夫なく子を孕む。人と為すを疑う所にして、乃（すなわ）ち海に泛（うか）べば辰韓に抵（到達）し、子を生む。海東（朝鮮）の始主と為る。帝の女（むすめ）を地仙と為し、長く仙桃山に在（ま）す。此はその像なり。臣、又、大宋國の信使（正式の使者）の王襄（おうじょう）の東神聖母を祭る文に、「賢を娠（はら）んで邦（くに）を肇（はじ）む」の句有り、乃ち東神則ち仙桃山の東神者と知る。然るも其の子何時に王たるかを知らず。今、但し、厥（そ）の初を原（根本となる）は、上（かみ）に在るは其れ己を為すや儉（つつま）し。其の人と為りや寛（ゆるやか）。官を設けるや略（はぶく）。其の事を行うや簡（おおまか）。至誠を以て中国に事（つか）える。梯（山）航（海）して朝聘（朝貢し献上する）使、相続いて絶えず。常に子弟を遣わし、朝に造（いた）り而して宿衛す。入学して講習す。聖賢の風化を襲（うけつぐにより鴻荒（こうこう；朝鮮古来）の俗を革（あらた）め、禮義の邦（くに）と為る。又王師の威霊に憑（よ）りて、百済、高句麗を平げ、その地を取りて、之（これ）を郡県とす。盛と謂うべし。而（しか）るに浮屠の法（仏法）を奉りその弊を知らず。閭里（りょり；村落）をしてその塔廟（とうびょう；仏舎利、仏像等を安置する堂塔）に比（したし）ましめ民を済（すく）い緇褐（しかつ；黒衣；僧侶）に逃れ、兵農は侵小（次第に少なくなる）し、而して国家は日々に衰えた。（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/73)）」と記している。
　高麗は新羅を継ぐものであり、その始まりは中国の皇帝の娘であり、我等は儒学の伝統を引き継ぐことで東夷ではないという立場を表明している。所謂小中華思想に連なるものであり、東夷の倭国に臣従するような歴史はありえないとする信念がある。したがって、日本書紀の記述を無視あるいは否定する傾向がある。
　朝鮮の歴史となれば、三国史記を学習することから始まるため、日本書紀の記述は虚構のごとくみなされがちとなる。その意味では、三国当時の中国の史家の観点が参考になる。中国人からすれば、朝鮮の歴史は中国東北地方の歴史となり、半島の人からすれば、独自性を否定されたと憤慨することになりがちである。小中華思想を以て反論することになる。漢、魏晋、宋の史書を見ておきたい。

　半島の東夷の諸情勢が中国で史書に記録されるようになるのは、まずは、漢の武帝（前141～前87）時代の匈奴遠征による情報収集が求められたことによる。また、武帝の時に漢が衛氏朝鮮を討ち、半島に郡県制を導入し、玄菟郡、楽浪郡を設置し、統治の記録が残されたことが大きい。
　司馬遷（前145／135～前87/86）の史記殷本紀、宋微子世家によれば、囚われていた殷の箕子を周の武帝が釈放し、箕子に殷が滅びた理由を問うと箕子はそれに応（こた）えるを憚（はばか）った。武帝が改めて天道を問うと、箕子が洪範九疇（五行 ・五事・八政・五紀・皇極・三徳・稽疑 ・庶徴 ・五福）について述べた。それに感服した武帝が箕子を臣とはせず、朝鮮に封じ、朝鮮が漢化されるはじめとなったとした。
　班固（32～92年）による漢書、地理志（中國哲學書電子化計劃、[地理志上103](https://ctext.org/han-shu/di-li-zhi/zh)）に、そのことが述べられている。「玄菟、楽浪を武帝の時に置く。朝鮮、濊（濊族）貉（貊族）句驪（高句麗）は皆蛮夷である。殷道が衰え、箕子が去り朝鮮に之（ゆ）き、其の民に礼義、田蠶織作（耕作や養蚕や機織り）を教えた。また彼等が犯していた八条を禁止し、守らせたたことで、東夷はの天性が柔順となり、南蛮、西戎、北狄とは異なった。孔子が東夷に行きたいと思った所以である。楽浪の海の中に倭人が有り、分かれて百余国と為る。歳時に来り献見すと云う」となっている。班固の頃には、朝鮮は中華から戦乱を逃れた者の避難先であり、彼等の教化によって半島の文明化がなされたとするのが漢人の認識となっていた。千年前の箕子をその始祖として定着させたようである。
　戦国時代中国北方では胡の侵入を防ぐ為に、秦の昭襄王（しょうじょうおう、在位前306～前251年）、趙の武霊王（ぶれいおう、在位前325～前298年）等が長城を築いていた。武霊王が胡服を取り入れ、騎射を習い、北方の林胡を破ったとあり、騎馬に対する防御が導入されたようである。燕の昭王（しょうおう、在位前312～前279年）の時、賢将の新開（しんかい）が胡の人質と為ったが、胡は彼に信を置いた。新開は帰国すると胡を襲い、胡は千余里東に後退し、燕は造陽（ぞうよう：河北省懐来県）より襄平（じょうへい：遼陽市付近）まで長城を築き、遼東半島に上谷（じょうこく）郡・漁陽（ぎょよう）郡・右北平（ゆうほくへい）郡・遼西郡・遼東郡の5郡を置いた（史記、匈奴列伝、維基文庫[HP](https://ja.wikisource.org/wiki/%E5%8F%B2%E8%A8%98/%E5%8D%B7110)）とある。
　天下を統一した秦始皇帝が建設した長城は、臨洮（りんとう；甘粛省中東部）から遼東まで（史記、蒙恬列伝）とあり、漢が燕を滅ぼすと、劉邦は竹馬の友盧綰（ろわん）を燕王に任じている。

**史記朝鮮列伝と西南夷両粤朝鮮伝**
　史記朝鮮列伝（維基文庫[HP](https://ja.wikisource.org/wiki/%E5%8F%B2%E8%A8%98/%E5%8D%B7115)）では、燕は真番（しんばん）、朝鮮に侵略し、官吏を置き鄣塞（防御子城）を築いた。秦が燕を支配した時は遼東を境界とした。漢は遠方で守り難く、遼東の旧塞を修復し浿水（ばいすい）を境界とし、燕に属せしめ、劉邦は盧綰（ろわん）を燕王にした。（劉邦は韓信等有力将軍が力を蓄えることを恐れた。楚の将軍・鍾離眜を匿ったことで韓信は謀反の嫌疑を得て左遷される。韓信は将軍陳豨に代の地で反乱を起せしめ、劉邦が出兵した隙に長安を落とす計を謀った。劉邦が出兵すると、盧綰も東北に出兵する。陳豨は黃求を派遣し匈奴と連携する。盧綰も張勝を派遣し匈奴を牽制しようとした。張勝が胡に至ると旧燕王臧茶の子衍が、陳豨の次に狙われるは燕王盧綰である、長く陳豨に戦ってもらうことが燕王を利すると聞き、張勝は匈奴に陳豨を援助させ、燕も攻撃させた。盧綰は張勝の反乱を疑ったが、その話を聞き、范齊を陳豨に派遣して陳豨の滅亡を遅らせた。韓信は計が事前に漏れ捕縛され殺される。陳豨討伐から帰った劉邦は、范齊の派遣を知り、盧綰にも謀反の嫌疑がかけられた。淮陰侯列伝維基文庫[HP](https://ja.wikisource.org/wiki/%E5%8F%B2%E8%A8%98/%E5%8D%B7092)、韓信盧綰列伝、維基文庫[HP](https://ja.wikisource.org/wiki/%E5%8F%B2%E8%A8%98/%E5%8D%B7093)）。劉邦が亡くなると盧綰は匈奴に逃げ、燕人の衛満（えいまん）が蛮夷の服装をして千人余を連れ、浿水を渡り、嘗て秦が駐屯した空き地に入った。上下を防御し、真番や朝鮮の蛮夷に役属（労役）し、古く燕や斉から亡命していた者等が衛満を王として、王険（おうけん）を都とした。漢の恵帝（けいてい）は彼を遼東太守、外臣とし、衛満は防御を固め蛮夷の君長に天子へ朝貢せしめ、真番、臨屯が服従した。
　衛満の孫の右渠（うきょ）が蛮夷の朝貢を阻止したことで漢は海陸双方から王険を攻撃した。王険は堅固であり、攻撃の失敗が続いた。一旦は外交交渉で解決しかけたが、使者の不手際でご破算となる。海軍と陸軍の連携がとれず、攻略は困難となり、結局は、内通により内部から崩壊せしめた。将軍や使者は責任を問われ罪に服し、右渠の下で漢への内通に応じたものが候に任命され、統治に当る結果となった。
　「朝鮮王の滿は、故燕人なり。始全（はじめ）て燕の時に嘗（かつ）て真番、朝鮮を略屬してより、吏を為置（しお）き、鄣塞（防御小城）を筑く。秦が燕を滅し、遼東を屬し外徼（境界）とす。漢興り、其れ遠く守り難しとし、遼東の故塞（軍事基地）を復修す。浿水（当初は鴨緑江とされるが清川江、大同江と時代により変化する）に至り界と為し、燕に屬す。燕王の盧綰が反（そむ）き、匈奴に入る。滿は亡命し、黨千餘人を聚（あつ）め、魋結蠻夷服（蛮夷の髪型服装）にして東に走り塞を出て、浿水を渡り，秦の故空地（軍事基地）に居り上下鄣（ふせ）ぎ、稍（しばし）真番、朝鮮の蠻夷に役屬（労役）し燕、齊の故（旧）亡命者が之を王とすに及び、王險に都す。

孝惠、高后の時天下初めて定まり、遼東太守即ち滿と（盟）約し外臣と為す。塞を保ち蠻夷を外にし、盜邊（侵犯辺境）を無からしむ。諸蠻夷の君長入りて天子に見（まみ）えむと欲（す）、得る勿きことを禁止す。以て聞こえ、上は之を許す。以故（したがって）滿は兵威や財物を得て其の旁（かたわら）の小邑を侵降し、真番、臨屯皆（すべ）て來りて服屬すること方數千里。

傳子が孫の右渠（うきょ）に至り、漢亡人を誘う所滋多（盛多）となり、又未だ嘗て入見（入朝謁見）せず。真番の旁の衆國は上書して天子に見えんと欲（す）、又擁閼（とどめ）通さず。元封二年（前109年）、漢の使（使者）の涉何（しょうか）譙（せめつ）け右渠を諭（さと）すも、終（つい）に不肯奉詔（詔を受け入れず）。（涉）何が去り界（国境）の上（ほとり）に至り、浿水に臨み、御（者）をして（涉）何を送る者、朝鮮裨王（東夷小王）の長を刺殺せしめ、即ち渡り、馳せ塞に入る。遂に歸りて天子に報じて曰く、「朝鮮を將（まさ）に殺せり」と。上は其の名を美（ほ）め即（すなわ）ち詰（問）せず。何を拜（任）じ遼東東部都尉とす。朝鮮は何を怨み、兵を發し襲い攻め何を殺す。
　天子は罪人を募り朝鮮を擊つ。其の秋、樓船（ろうせん）將軍楊僕（ようぼく）を遣（つかわ）し齊より渤海に浮ぶ、兵五萬人。左將軍荀彘（じゅんてい）は遼東を出で、右渠を討つ。右渠は兵を發し險（王險）を距（ふせ）ぐ。左將軍は正（規軍）多を卒（ひき）い、遼東兵を率い先縱（功を焦った先遣部隊）は敗散し、多く還走し、坐法斬（違反で斬首）された。樓船將軍は將（まさ）に齊兵七千人で先に王險に至る。右渠は守を城り、樓船軍が少いことを窺い知り、即ち城を出て樓船を擊つ。樓船軍は敗れ散走す。將軍楊僕は其の衆を失い、山中に遁（かくれる）こと十餘日、稍に散卒を求收し、聚に復す。左將軍は朝鮮の浿水西軍を擊つも、未だ自前を破ること能わず。

天子は兩將未だ利有らずと為す。乃（すなわ）ち衛山（えいざん）をして兵威に因りて往きて右渠を諭せしむ。右渠は使者を見て頓首し謝す、「願わくば、降（伏）せむ、恐るらく兩將は詐りて臣を殺さむ。今信節（衛山）に見（まみ）え、服降を請う」。太子を遣して入謝（入朝謝罪）し、馬五千匹を獻じ、及ち軍糧を饋（おく）る。人衆萬餘が兵（器）を持ち、方（まさ）に浿水を渡らんとす。使者及び左將軍は其れ變を為すを疑い、太子に謂（かた）る、已（すで）に服降しており、宜命に人、兵を持つこと毋（なか）れとある、と。太子、亦、使者と左將軍が詐りて殺すことを疑い、遂に浿水を渡らず、復（また）引き歸る。（衛）山は還りて天子に報ず。天子は山を誅す。

左將軍は浿水上軍を破る。乃ち前、城下に至り、其の西北を圍む。樓船も亦往きて會し、城の南に居る。右渠は遂（その結果）堅く城を守ること、數月して未だ下すこと能（あた）わず。

左將軍は素（もと）より侍中（皇帝側近）、幸にして、燕代の卒、悍（猛々しい）を將（ひき）いて、勝に乘り、軍多（さわ）に驕る。樓船は齊卒を將いて、海に入り、固より已に多（さわ）に敗亡せり。其の先は右渠と戰い、辱亡せる卒に因り、卒皆て恐れ、將（まさ）に心慚（は）じ、其れ右渠を圍み、常に和節を持す。左將軍が急に之を擊つ。朝鮮の大臣は乃ち陰（ひそか）に閒（離間）すに人をして私（ひそか）に樓船に降るを約せしめ、往來して言うも、尚未だ肯決（決断）せず。左將軍は數（しばしば）樓船と期戰（会戦）す。樓船は急に其の約に就かんと欲（す）も、不會（出来ず）。左將軍は亦、人をして閒（離間）を求め朝鮮に降下すを卻（拒絶）せしむ。朝鮮は肯（承知）せず、樓船に心附（執心）す。以故（このため）兩將は不相能（不和となる）。左將軍の心意は樓船に前に失軍の罪が有り、今朝鮮と私に善（よし）みても又降らず、其れ反計有りと疑うも、未だ敢て發せず。天子の曰く將に率すこと能わず。前に（及）［乃］ち衛山をして右渠を諭し降せしめ、右渠は太子を遣わすも、（衛）山は(太子に)剸決（決断）せしむこと能わず。左將軍と計（はか）ること相誤り、卒は約に沮（ひる）む。今兩將は城を圍むも、又乖異（食い違う）。以故（このため）久しく決（断）せず。濟南太守の公孫遂（こうそんすい）をして往（征）［正］かしむ。便宜（適宜処置する権限）有り從事できた。遂が至ると、左將軍の曰く、「朝鮮當に下りて久しいも、下らぬ者有る狀（さま）」と。樓船が數（しばしば）期不會（その期にあらず）と言う。具（つぶさ）に素（そのまま）を以て意（おも）う所を遂に告げて曰く、「今かくのごとく取らずば、恐るらく大害となるは、獨（ひと）り樓船のみに非らず、又そして朝鮮と共に吾軍も滅びよう」と。遂も亦然りと思い、節を以て樓船將軍を召し、左將軍の營に入れて事を計る。即ち左將軍麾下に命じ樓船將軍を執捕（めしと）り、其の軍を并（あわ）せ、以て天子に報ず。天子は遂を誅（？許）す。

左將軍は已に兩軍を并せ、即ち朝鮮を急擊す。朝鮮の相の路人（ろじん）、相の韓陰（かんいん）、尼谿（にけい）の相の參（さん）、將軍王唊（おうきょう）は相與（あいとも）に謀りて曰く、「始め樓船を降さんと欲（す）、船は今執られ、獨り左將軍は將に并され、戰は益（ますます）急、恐るらく與（くみ）すこと能わず。（戰）王は又降ること不肯（承知せず）」と。（韓）陰、（王）唊、路人皆て漢に亡降（亡命降伏）す。路人は道に死す。元封三年の夏，尼谿の相の參は乃ち人をして朝鮮王の右渠を殺せしめて來降す。王險城は未だ下らず、故右渠の大臣の成巳（せいし）が又反き、復（また）吏を攻める。左將軍は右渠の子の長をして降らしむ。相の路人の子の最が其の民に告げて諭し、成巳を誅せしむ。以故（このため）遂は朝鮮を定め、四郡を為した。參を封じて澅清侯となし、（韓）陰を荻苴侯となし、（王）唊を平州侯となし、長［降］を幾侯となした。最は父の死を以て頗（すこぶ）る功有り、溫陽侯となす。

左將軍は徵至（召喚）され、功を爭（あらそ）い相い嫉（ねた）み、計に乖（そむ）く罪で、棄市（死体を市にさら）された。樓船將軍も亦坐兵が洌口に至、當に左將軍を待つを、擅（勝手）に先縱（先駆け）し、失亡すること多く、當に誅さるも、(罪を)贖（あがな）い庶人となる。

太史公曰く、右渠は負固し（険阻をたのむ）、國以て祀を絕える。涉何は功を誣き、兵を為す發首（事件の主要責任者）。樓船將は狹（量）、難に及びて離(反)の咎（とが）。番禺を失うを悔む。乃ち反を疑われる。荀彘は勞（勞績，小功）を爭い、遂と皆（すべ）て誅さる。兩軍俱（とも）に辱しめ、將率して侯とされるもの莫（な）し」とある。
（衛氏朝鮮、四郡、浿水、王険の位置については説が分かれる。従来説との比較があり、日本古代史の復元、佃收著、[HP](https://tsukudaosamu.com/pdf/1-3.pdf)　を参照した。）
　班固は史記朝鮮列伝を引用し、西南夷両粤朝鮮伝（中國哲學書電子化計劃、[HP38](https://ctext.org/han-shu/xi-nan-yi-liang-yue-zhao/zh)）とした。大略は同じであるが、「真番、朝鮮の蠻夷」を「真番、辰国」としており、朝鮮南部を班固当時では辰国とみていたことになる。また韓陰を韓陶とし、「陰を荻苴侯」を「陶を秋苴侯」、「最を溫陽侯」を「最を沮陽侯」と訂正している。

**魏略と魏志東夷伝**
　東夷に関する情報は、魏が楽浪郡で力を有した公孫（こうそん）氏を討ったことで増大した。公孫氏が呉の孫権に呼応し、魏の背後を脅かしたことが発端となった。魏志倭人伝で倭の卑弥呼が親魏倭王に任じられ、政権の記録が残された事は、卑弥呼が公孫氏の背後から魏に加担したことが関係していよう。
　魏の毌丘倹（かんきゅうけん）による半島統一があり、このことによる知見の拡大があり、魏の魚豢（ぎょけん、生死年不明）が司馬遷、班固の記述をもとに、魏略（逸文のみ）を著わすこととなった。これは私撰であるが、陳寿（ちんじゅ、233～297年）が魏略も引用し、三国志・魏志東夷伝を編纂するに及んだ。彼は蜀（四川）で儒学と史学を学び、司馬遷や班固とは異なり正史はさることながら、地方史編纂に意欲があった。
　蜀が魏に敗れて後に中央に出たところ、蜀漢の諸葛亮（孔明）の文書集『諸葛亮集』への評判が高まり、魏の司馬衷（しばちゅう、恵帝）に仕えた張華（ちょうか）等に見出され、宮中文庫の管理者に就任する。張華は以前、司馬炎（しばえん、武帝）の時に都督幽州諸軍事に左遷されたが、安北将軍・護烏桓校尉を兼任し、幽州で安定した統治を行い、東夷の朝貢を増加せしめている。彼のもとに東夷の諸情報が集り、文人でもあった張華は膨大な情報を以て博物誌四百巻を著述したが、帝の司馬炎によりあまりに荒唐無稽な記述の削除を命ぜられたのでしょう、「博物誌」十巻（中國哲學書電子化計劃、[HP](https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&res=201871)）となった。陳寿はそれ等を利用することが出来た（張華『博物志』と陳寿『三国志』における文章合致、三国与太噺、[HP](https://akanisin.hatenablog.com/entry/20120117/1326727604)）。また彼は、朝見者の上表を管理する立場にもあったとみられ、魏志東夷伝は当時の現実を反映する一級の伝となっている。

　魏志東夷伝（維基文庫[HP](https://zh.wikisource.org/wiki/%E4%B8%89%E5%9C%8B%E5%BF%97/%E5%8D%B730?uselang=ja)）では、夫餘（ふよ）、高句麗（こうくり）、東沃沮（ひがしよくそ）、挹婁（ゆうろう）、濊（わい）、韓（かん）（維基百科、[地図](https://zh.wikipedia.org/zh-cn/%E4%B9%90%E6%B5%AA%E5%9B%BD#/media/File:前三国.jpg)）、倭人の伝として収録されている（夫餘～濊の原文、訳、注は[『 魏志』 東夷伝訳註初稿（ 1 ）](https://rekihaku.repo.nii.ac.jp/records/1719)田中俊明 に詳しい）。陳寿は東夷伝の序において、時代による中国圏の認識、及び史書の扱う範囲の拡大について述べている（『 三国志 』東夷伝 倭人の条に現れた世界観と国際関係、渡邊義浩、[HP](https://spc.jst.go.jp/cad/literatures/6)に詳しい）。
　書経では夏・殷代は王畿（千里四方）の外に五服（各五百里の服属地域、侯服・旬服・男服・采服・衛服）としていたが周代には九服（蛮服・夷服・鎮服・藩服を追加）とした。西は砂漠（西戎）、東は海（東夷、粛慎）が境界でそこからの朝貢があった。漢では張騫（ちょうけん）を西域に派遣し、西域都護府（[地図](https://www.wikiwand.com/ja/%E8%A5%BF%E5%9F%9F#Media/ファイル:Xiyu_City-States_of_Tarim_basin_(BC1C).jpg)）を置いたことで史官は西域のことを詳しく記録することが出来た。魏ではそれ以上に西域を広げることが出来なかったが、龜茲（きじ；クチャ）、于寘（うてん；コータン）、康居（こうきょ；カンジュ）、烏孫（うそん）、疏勒（そろく；カシュガル）、月氏（げっし）、鄯善（ぜんぜん）、車師（しゃし）（[地図](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BB%8A%E5%B8%AB#/media/ファイル:紀元前2世紀西域地図.png)）からは毎年朝貢がなされた。
　遼東では父祖以来三世の公孫淵（こうそんえん）がおり、東夷は東の僻地であり天子は東夷のことを公孫淵に委ねていた。しかし、東夷の朝貢を通じなくしたため、景初中（238年）に旅師（大軍）を送り、公孫淵を誅し、軍を海からも送り、楽浪、帯方郡を収め、辺境は落ち着き、東夷も屈服した。朝鮮の右渠を討つに、先に樓船で多くの斉兵が動員されたことをみた。こういう場合には、斉兵がよく用いられたようである。先の朝鮮列伝においても、膠着した戦線に斉南太守公孫遂（こうそんすい、公孫とは公「諸侯、この場合斉公」の孫の義）が派遣され、「遂は朝鮮を定め、四郡を為し）」とあり、楽浪には公孫氏の子孫の集団が居り、公孫度や公孫淵は彼等の協力を得たのであろう。
　その後、魏は高句麗が背いたので偏師（小軍）を送り、極めて遠方まで追い詰めた。烏丸、骨都を越え、沃沮を過ぎ、粛慎の朝廷に踏み込み、東の大海に臨んだ。長老が云うに日の出る近くに異面の人（入れ墨の倭人）有りという。ついにあまねく諸国を見て、その法俗、小大区別を采り、各々名有るを号（なづ）けたため、それらを詳しく整理して記すことが出来た。夷狄の邦（くに）とはいえ、俎豆之象（祭祀の礼の形）があり、中国が礼を失い、之を四夷に求めたこと（孔子のこと）も、まあ信じられよう。故に、その国々を撰んで順序立て、その異同を列し、これまでの史書に備わらなかったところに触れた。

　半島南については、嘗て辰国と一括されていたが、馬韓、辰韓、弁韓の三韓とみなし、辰韓が古の辰国とする認識ともなっている。辰韓は秦が滅びた時に韓国に亡命してきた秦人の一部（燕や斉とは別）が南下し、馬韓が東界を裂いて与えた処とみなされている。辰国が何時、如何なる経緯で韓国、あるいは辰韓とみなされたか、また、三韓の韓が何に由来するのかが不明であり、困惑する。
　馬韓については辰王の月支国を中心とする五十余国からなるとされ、大国は万、小国で数千の人口、総計十万余とある。国のトップは臣智、遣支報など？（解釈が難しい、三韓社会における辰王と臣智、武田幸男「[上](https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003044)」「[下](https://irdb.nii.ac.jp/00926/0005217933)」参照）と称され、魏から率善、邑君、歸義侯、中郎將、都尉、伯長などの位が授けられた。これらの組織については、漢が導入し、公孫氏がそれを引き継ぎ、魏が改めて授けた。
　その経緯については「魏略」を引用している。秦が滅びると、朝鮮候であった準（箕準）が朝鮮王と称したのであるが、燕の衛満に庇を貸して母屋を取られる。準が辰国に逃れ（箕氏であるに）韓王を号した。すでにその地は辰国ではなく韓国と見なされていたことになる。
　魏略の認識では、朝鮮の宰相の曆谿（れきけい）が準（前195年頃）を諫めて容れられず、東、辰国に二千余戸を連れて去った。東からすればこの辰国は後の辰韓に当る。漢の王莽の時（前45年-23年）に、辰韓の廉斯（れんし）邑の渠帥（きょし；首長）の鑡（さく）が楽浪郡にあこがれ目指した。道中に、曆谿卿に従った漢人の子孫とみられる戸来（こらい）から、奴（奴婢）とされた漢人の話を聞き、戸来を伴い楽浪に至る。楽浪では鑡を戸来の通訳として辰韓に送り、鑡の策で残存漢人子孫を救い、死者とその償いに辰韓の民と弁韓の布を持ち帰ったとしている。
「《[魏略](https://zh.wikisource.org/wiki/%E9%AD%8F%E7%95%A5)》曰、其の子及び親（みずから）國に留在（残存）する者は、因りて韓氏を冒姓（仮に名のる）。准王は海（外）に中（あた）り、朝鮮と相往來せず」とあり、また、「《[魏略](https://zh.wikisource.org/wiki/%E9%AD%8F%E7%95%A5)》曰く、初め，右渠が未だ破れぬ時に、朝鮮の相の曆谿卿（れきけいきょう）は以て右渠を諫めるも用いず。東に辰國に之（ゆ）く。時に民隨いて出居（遷居）する者二千餘戶、亦朝鮮と貢蕃（真番）とは相往來せず。王莽地皇の時に至り、廉斯（れんし）の鑡（さく）辰韓の渠帥と爲り、樂浪の土地が美（よ）く、人民が饒樂（ゆたか）と聞き、亡（さ）りて來降せんと欲（す）。其の邑落を出で、田中の雀を驅る男子一人を見る。其の語、韓人に非ず。之に問う。男子曰く、「我等は漢人、名は戶來、我等が輩は千五百人にして材木を伐る。韓の爲（ため）に擊たれる所を得て、皆て髮を斷たれ奴と爲ること、積りて三年になる」。鑡が曰く、「我は當に漢の樂浪に降る、汝去らんと欲（せ）ずや」。戶來が曰く、「可なり」。（辰）鑡は因りて戶來（來）を將（ひき）い出で含資縣に詣る。縣は郡を言う。郡は即ち鑡を以て譯（通訳）と爲す。芩中（地名）より大船に乘りて辰韓に入り、戶來を逆取し（戶來を楽浪郡の官吏として逆手にとり）、降伴輩（降伏した仲間）尚千人を得る。其の五百人は已に死せり。鑡は時に辰韓に曉（さと）して謂く、「汝は五百人を還すべし。若（も）し不者（せねば）、樂浪は當に萬兵を遣わし乘船し來りて汝を擊たんとす」。辰韓が曰く、「五百人は已に死せり。我は當に贖を出し直（ただ）すのみ」。乃ち辰韓は萬五千人、弁韓の布萬五千匹を出す。鑡は收取して直に還る。郡は鑡が功義を表し、冠を幘に賜い、田宅、子孫數世にして、安帝[延光四年](https://zh.wikisource.org/wiki/Category%3A125%E5%B9%B4_%28%E6%8F%90%E5%8F%8A%29)に至り時に故に復（また）除を受ける。」
　陳寿は、韓王（準）の後裔は絶滅したが、韓人を祭祀する者があるとしている。韓を称する所以について記述はない。衛氏（燕人）朝鮮には燕や斉からの亡命漢人が多いのであるが、先に、韓陰（陶）という人物をみた。秦に滅ぼされた韓からの亡命者が流入し、彼等が農耕・畜産や養蚕を教え、力を有し韓王という名称を導入していたとでも考える他あるまいが、そのような記述もない。
　衛満が漢により討たれて後に韓の地から季節毎の朝貢があった。後漢末には韓と濊が強盛となり、郡県制の維持ができなくなり、公孫氏がそれらから逃れてくる民そして漢人を集め、帯方郡を建て、韓濊を討った。倭と韓も帯方に属したとある。
　後漢の光武帝の時に奴国が王に任じられており、倭は早くから半島を経由して朝貢していたのであり、陳寿のいう倭は卑弥呼の邪馬台国となる。魏は帯方郡において倭が公孫氏に対して魏と協力したことを評価し、倭人伝を別途設けたのであろう。
　弁辰については、馬韓と辰韓とは異なるものがあるとみていた。十二国で諸邑に、「各（おのおの）渠帥有り、大は臣智と名づけ、其の次に險側有り、次に樊濊有り、次に殺奚有り、次に邑借有り」と他より組織立っており、「土地は肥美にして、宜種は五穀、稻に及び、蠶桑を曉（し）り、縑布を作り、牛馬を乘駕す。嫁娶に禮俗、男女の別あり。大鳥羽を以て死を送り、其の意は死者をして飛揚せしめんと欲（す）」、「國に鐵(鉄)を出ず。韓、濊、倭は皆、從いて之を取る。諸の巿買（交易）に皆鐵を用いるは、中國で錢を用うが如し。又、以て二郡に供給す」、「弁辰と辰韓とは雜居す。亦城郭有り。衣服や居處は辰韓と同じ。言語や法俗は相似るも、鬼神を祠祭するに異有り」とみている。倭人が漢や魏と交易をするには、弁辰の交易力、海運力、そして何よりも決済用の「鉄」を必要とした。

**宋書**
　いわゆる倭の五王の時代の記録は沈約（しんやく、441－513年）の宋書、列伝五十七夷蛮、東夷（維基文庫[HP](https://zh.wikisource.org/wiki/%E5%AE%8B%E6%9B%B8/%E5%8D%B797)）に残されている。宋書編纂に至る経緯については、列伝末第六十に自序（維基文庫[HP](https://zh.wikisource.org/wiki/%E5%AE%8B%E6%9B%B8/%E5%8D%B7100)）に記されている。
　沈約の祖は、中国古代五帝の少暤（少昊金天氏）の時代に溯る名門であり、家系について順を追って記している。自身は若年より学を好み、頓挫している晋書の編纂に二十歳で取り組んだ。時代は晋から宋そして斉に転じ、資料を蒐集するも一部盗難に遭うことがあり、また、編纂以外の仕事にも就かされ、資料は揃ってきたが継続が困難であった。しかし、積年の準備があり、永明五年（487年）春に勅を得ると、驚くべき速さで翌年二月に「宋書」の編纂を終えていた。
「史臣（沈約）は年十三にして孤なり、少（わか）くして頗（すこぶ）る學を好み、棄日（無為に過ごし）功無しと雖も、伏膺（戒めを心得）改めず。常に晉氏一代を以て、竟（つい）に全書無く（晋書は全書編纂されなかった）、年二十ばかり、便（すなわ）ち撰述の意有り。泰始の初に、征西將軍の蔡興宗（さいきょうそう）明帝に啟し（申し上げ）、敕有りて許を賜り、此より今迄、年二十を逾して、撰す所の書、凡そ一百二十卷。條流（綱目）舉ぐと雖も、掇（集録）を采るに未だ周（あまね）からず，永明の初に、盜に遇い第五帙を失う。[建元四年](https://zh.wikisource.org/wiki/Category%3A%E9%9C%80%E8%A6%81%E6%8C%87%E5%AE%9A%E5%85%AC%E5%85%83%E7%9A%84%E7%B4%80%E5%B9%B4)の未終、敕を被り國史を撰す。[永明二年](https://zh.wikisource.org/wiki/Category%3A484%E5%B9%B4_%28%E6%8F%90%E5%8F%8A%29)、又朅（さ）りて奏して著作郎を兼ね、起居注を撰次（整理）す。茲（これ）より王役となり、搜撰す暇無し。五年春に、又敕を被り[宋書](https://zh.wikisource.org/wiki/%E5%AE%8B%E6%9B%B8)を撰す。六年二月に功畢（おわ）りて、之を表上す」
　西南夷の天竺（てんじく）迦毗黎（かびり）国（[百度百科](https://baike.baidu.com/item/%E5%A4%A9%E7%AB%BA%E8%BF%A6%E6%AF%97%E9%BB%8E%E5%9B%BD/18698313)）条には、佛道の項目が設けられている。儒教が漢代に国教とされ、帝王学として治国平天下の規範となったが、道教あるいは不老不死、神仙を求める心も衰えることはなかった。不老不死薬を作る金丹術、錬金術は薬学や木石金属加工技術を発展させ、仙人となる呼吸法、駆邪・押煞（おうさつ：厄除け）法を修業する道士が流行するなかで、仏教の経典の翻訳が進み、輪廻や極楽浄土、地獄、出家、涅槃という考え方が不老不死に新たな世界を開いた。日常においては仏像や仏具、工芸品、寺院建築が人々の目を奪い、僧侶の養成、寺院の運営がシステムとして行われ、戒律により規制され伝授されてゆくことが富と権力を強化する役割を果たした。
　しかし、この当時には、丹青に彩られ金銀宝石を施された極楽浄土に坐す銅の仏像の寺院建築を競って建立した結果、民は土木工事に駆り出され、政権は財政負担に困窮する事態を迎え、批判の声があがっていた。そして、仏教と在来の儒学、道教とのあり方についての知識人の模索が課題となっていた。慧林（えりん）の著した『均善論』では、儒教を代表する白学先生と、仏教を代表する黒学先生の対論が掲載されている（『均善論』については、「劉宋の慧林について、鵜飼光昌、[HP](https://buddhism.lib.ntu.edu.tw/FULLTEXT/JR-AN/an142214.pdf)」を参照した）。佛道のこの議論が何故か西南夷の条に採録されている。
　三国時代末から晋代初期には、老荘思想により世俗から離れ、清談を交える隠者「竹林の七賢人」が現われた。仏教の出家でも、老荘の隠者でもなく、政権の渦中に役職に就き、隠逸と称する生き方を求める動きがあった。「廟堂の上に在ると雖も、その心は山林の中に異なることなし」、「小隠は陵藪（りょうそう）に隠れ、大隠は朝市（ちょうし）に隠れる」、「官途にありながら心を塵外（じんがい）に遊ばせる」というような心境とあり、沈約もその一人であった（沈約の隠逸思想、神塚淑子、名古屋大学学術機関リポジトリ参照）。

　東夷については、高句麗、百済、倭国について言及されている。新羅からは朝貢がなかったためか、三国に関連して記されるにすぎない。
　高句麗については、魏志東夷伝の高句麗条を引き継ぎ、高璉（こうれん、長寿王）から始めている。高句麗では広開土王（談徳、だんとく）の没後（413年）、直ちに長寿王が晋の安帝に長史の高翼（こうよく）を派遣し、天子の徳を称える名馬とされる赭白馬（つきげのうま）を献上し、「使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公」を除授された。安帝は416年に百済王映（えい、腆支）を「使持節、督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王」に与えている。これは、百済近肖古王が371年に高句麗を討ち、372年に使を送り、晋に朝貢し、文帝より「鎮東将軍領楽浪太守」を得た歴史を反映している。
　当時の高句麗の北魏と北燕（407－436年）、また、北魏と東晋及び宋との間の外交・軍事については、「倭の五王との関連、9頁末」に触れた。後燕（384－407年）の慕容宝（ぼようほう）は北魏に攻められ、黄竜（遼寧省朝陽市）に逃れ、弟の熙（き）の時、部下の漢人将軍馮跋（ふうばつ）が熙を殺し、高句麗系の養子[慕容雲](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E9%9B%B2)（高雲）を立て、雲が殺されると自ら王となり北燕を開いた。その子の弘（こう）の時、北魏に攻められ、高句麗に逃れ、宋に救援を求めた。長寿王は高璉、高氏であり、高雲の後燕の時は関係が改善したが、彼が殺されたこともあり、高句麗は宋の弘救援に応じかね弘を殺した。そういうスタンスの違いはあるが、宋は高句麗を重要視した。
　高句麗は北魏に朝貢し、官職を得て漢化政策を進めるも、自国の安全を確保するために、東晋や宋の後ろ盾も必要とした。東晋や宋にとっては北燕や北魏を牽制する意味で、高句麗を重視しており、官職を与えた。
東夷高句驪國、今漢の遼東郡を治む。高句驪王の高璉、晉安帝の義熙九年（413年）、長史高翼を遣わし表を奉り赭白馬を獻ず。以て璉を使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公と為す。高祖踐阼（即位）し、詔して曰く、「使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公の璉、使持節、督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王の映、並びて義を海外の執り、遠く貢職を修む。惟れ新たに始を告ぐに、宜に國休を荷いて、璉を征東大將軍と可（すべ）し、映を鎮東大將軍と可し。持節、都督、王、公は故（もと）の如し。」三年に、璉に散騎常侍を如へ、督平州諸軍事を增す。少帝景平二年（424年)、璉は長史馬婁等を遣わし闕（宮殿）に詣で方物を獻ず。使を遣わし之を慰勞して曰く、「皇帝問う、使持節、散騎常侍、都督營平二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公、戎を纂し東に服し、庸績（功績）繼軌（前代の業を承け）、厥（そ）の惠既に彰らかにして、款（ねんごろ）にして誠なること亦著しく、遼を踰（こ）え海を越え、本朝に納貢す。朕以て不德して、鴻緒（統治の大業）を忝承（謹んで継承）す。永く先蹤（先例）を懷（おも）い、遺澤（後世に残る恩沢）を思覃（深思）す。今謁者の朱邵伯、副謁者の王邵子等を遣わし、慰勞を宣旨せしむ。其の茂康（多功）惠政、厥の功を永く隆（たか）め、式昭（功績を輝かせ）往命（命を果たせ）、朕意を稱（かな）えよ。」

是に先して、鮮卑の慕容寶が中山を治め、索虜（北魏の蔑称）の為（ため）に破られ、東に黃龍に走げる。義熙初（405年）に、寶の弟の熙が其の下の馮跋が為に殺され、跋は自ら立ちて主と為（な）り、自ら燕王を號す。以て其れ黃龍城を治む。故に之を黃龍國と謂う。跋が死す。子の弘が立つ。屢（しばしば）索虜の為に攻られ、下ること能わず。太祖の世は、每歲使を遣わし方物を獻ず。元嘉十二年(435年)、加えて除授を賜る。十五年に、復（また）索虜の為に攻られ、弘は敗走し、高驪の北豐城に奔（はし）る。表して迎接を求む。（宋の）太祖は王白駒、趙次興を遣わし之を迎えしめ、并せて高驪に料理資遣（弘の支度を整え送ること）を令す。璉は弘を南せしむを欲（おも）わず、乃（すなわ）ち將の孫漱、高仇等を遣わし襲いて之を殺す。白駒等は所領七千餘人を率い漱等を掩(囲み)討ち、漱を生禽（いけどり）し、高仇等二人を殺す。璉は白駒等が專（専横して）殺すを以て、使を遣わし執（とら）えて之を送る。上は以て遠國なれど、其の意に違うを欲（おも）わず、白駒等を獄に下すも、見原（寬恕、ゆるされた）。

璉は每歲使を遣わす。十六年、太祖（文帝）は北討を欲（おも）い、璉に詔して馬を送る。璉は馬八百匹を獻ず。世祖（孝武帝）の孝建二年（455年），璉は長史董騰を遣わし表を奉り國哀（国葬）再周を慰し、幷せて方物を獻ず。大明三年（459年），又肅慎氏楛矢石砮を獻ず。七年（463年）、詔して曰く、「使持節、散騎常侍、督平營二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公璉は、世事に忠義、藩海外を作（な）し、誠は本朝に係(通)じ、志は殘險（北の諸族）を剪（う）ち、沙表（北の砂漠以北）に通譯し、宣王の猷（はかりごと）に克つ。褒進を加える宜（べし）、以て純節（節操）を旌（あきらか）にす。車騎大將軍、開府儀同三司，持節、常侍、都督、王とすべし、公は故の如し。」太宗泰始（265～269年）、後廢帝元徽（473～477年）の中、貢獻が絕えず。

　百済について、中国側は、そもそも高句麗と同じと見ている。高句麗が遼東に進出し、百済が遼西に進出し統治をしたとしている。中国側では、遼西、遼東、玄菟郡、楽浪郡、帯方郡までの政治動向が視野の範囲であった。まして南朝の時代では北朝との対立の脈絡で高句麗をどう自陣に引き込むかが要になっており、それには半島の軍事情勢を的確にとらえ、如何なる範囲の王であり、その王を如何なる将軍に任じるかがポイントとなっている。
　「本は高驪と俱に遼東の東千餘里に在り、其の後高驪は遼東を略して有（たも）ち、百濟は遼西を略して有つ。百濟が治む所、之を晉平郡晉平縣と謂う。
　義熙十二年（416年）、以て百濟王の餘映を使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王と為す。高祖が踐阼（即位）すと、進めて鎮東大將軍と號（なづ）く。少帝の景平二年（424年）、映（三国史記百済本記では映は420年に薨去、424年は空白で朝貢の記載はない）は長史の張威を遣わし闕に詣で貢獻す。元嘉二年（425年）、太祖は之に詔して曰く、『皇帝が使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王を問う。累葉（代々）忠順にして、海を越え効誠（誠意）、遠くして王は纂戎（先人の武功を継承）し、先業（先人の徳業）を聿修（継承発揚）し、慕義（仁義に傾慕）すること既に彰らかにして、厥（そ）れ赤款（忠誠真心）を懷き、驪水を浮桴（航行）し、賝（宝物）を獻じ執贄（礼物を携える）、故に嗣位（君位を継承し）方任（その地位にあり）、以て藩し東服し、所莅（統治）に勉勗（はげ）み、前蹤（先人の事業の跡）を墜（うし）なわず。今、遣兼謁者の閭丘恩子、兼副謁者の丁敬子等、慰勞を宣旨し朕意に稱（かな）えり。』其の後每歲使を遣わし表を奉り、方物を獻ず。七年，百濟王の餘毗は復（また）貢職を修む。以て映は爵號之を授かる。二十七年、毗は上書し方物を獻ず。私假臺使の馮野夫、西河太守、表して易林、式占、腰弩を求め、太祖並びて之を與える。毗が死に，子の慶代りて立つ。世祖大明元年（457年）、使を遣わし除授を求む。許を詔す。二年、慶は使を遣わし上表して曰く、『臣の國は累葉、殊恩を偏受（格別に受け）し、文武に良輔（賢良な輔弼）、世に朝爵を蒙る。行冠軍將軍右賢王餘紀等十一人、忠勤にして顯進（昇進）在る宜（べ）し、伏して垂愍（厚情）を願わん、並びに除を賜うこと聽（ゆる）されたし。』仍ち行冠軍將軍右賢王餘紀を以て冠軍將軍と為す。行征虜將軍左賢王餘昆、行征虜將軍餘暈を以て並びて征虜將軍と為す。行輔國將軍餘都、餘乂並びて輔國將軍と為す。行龍驤將軍沐衿、餘爵を以て並びて龍驤將軍と為す。行寧朔將軍餘流、麋貴を以て並びて寧朔將軍と為す。行建武將軍于西、餘婁を以て並びて建武將軍と為す。太宗泰始七年（471年）、又使を遣わし貢獻す」。

　倭国については、魏志倭人伝により倭国が半島に於いても有力な勢力であることが分かっており、別項を設けた。
　倭国は、宋高祖（武帝、劉裕）の時から除授を求め、太祖（文帝、劉義隆）の時には、讚が「使持節、都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王」を求めるも「安東將軍、倭國王」のみ除された。弟の珍が十三人に「平西、征虜、冠軍、輔國將軍號」を求め、除された。済は元嘉二十八年（451年）、「安東將軍、倭國王」に加え、「使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事」を得、二十三人が（将）軍あるいは郡（の司）に除された（雄朝津間稚子宿禰天皇、允恭天皇、在位412～453年）。
　済の子、興は、世祖（孝武帝）大明六年（462年）に「安東將軍、倭國王」に戻っており、弟武は「使持節、都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事、安東大將軍、倭國王」のみならず「開府儀同三司」を自称し、順帝（劉準）昇明二年（478年）に「使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王」に除された（大泊瀬幼武天皇、雄略天皇、在位457～479年）。宋側の認識ではこうなるが、日本書紀では一切このことに触れられていない。また、天皇の在位と五王との関係が合致していない。

**倭國は**高驪の東南の大海中に在り。世貢職を修む。高祖は永初二年（421年）、詔して曰く、「倭の讚は萬里貢を修め、遠く誠甄（あきらか）なる宜（べ）し、除授を賜わる可（べ）し。」太祖元嘉二年（425年）、讚は又司馬曹達を遣わし表を奉り、方物を獻ず。讚が死す。弟の珍が立つ。使を遣わし貢獻す。自ら使持節、都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭國王を稱す。表して除正（公認）を求む。詔して安東將軍、倭國王に除す。珍は又倭隋等十三人平西、征虜、冠軍、輔國將軍號の除正を求め、詔して並びて聽（ゆる）す。二十年（443年）、倭國王の濟は使を遣わし獻を奉り、復（また）以て安東將軍、倭國王と為（す）。二十八年（452年）、使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事を加え、安東將軍は故（もと）の如し。并せて上二十三人軍、郡に除さる。濟が死す。世子の興は使を遣わし貢獻す。世祖大明六年（462年）、詔して曰く、「倭王の世子が興、奕世（世を重ね）酔載（卒歳）忠にして、外海に藩と作（な）り、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しみて貢職を修む。新たに邊業を嗣ぎ、宜しく爵號を授く。安東將軍、倭國王とす可し。」興が死し、弟の武が立つ。自らを稱す。
順帝昇明二年（478年）、使を遣わし上表して曰く、「封國（我国）は偏たること遠く、藩を外に作し、昔より祖禰（祖先）、躬（みづから）甲冑を擐（着用）し、山川を跋涉し（山を越え、川を渡り）、寧處（ゆっくり）す遑（いとま）なし。東に征すこと毛人五十五國、西に眾を服すこと夷六十六國、海を渡り平らぐこと北九十五國、王道は融泰（融合安泰）し、土（くに）を廓（ひら）き畿を遐（ひら）き、累葉（代々）朝宗（拝謁）し、歲に愆（たが）わず。臣は下愚と雖も、忝みて先緒を胤（つ）ぎ、統（す）ぶ所を驅率（ひき）い、天極（天帝）に歸崇（帰順尊崇）し、道は百濟を逕（へ）て、船舫（海上船）を裝治（ととの）えるも、句驪（高句麗）は無道にも、圖（はか）りて欲見吞（見下し）、邊隸（周辺民）と掠抄（略奪）し、虔劉（殺戮）すること已（や）まず、每（つね）に稽滯（留滞）を致し、以て良風失（う）せる。進路を曰（い）えども、或は通じ或は不（ならず）。臣が亡考（ちち）濟は實（まこと）に寇讎（あだ）の天路を壅塞（ふさぐ）を忿（いか）り、控弦百萬（兵が大挙し）、義聲（徳義に）感激し、方（まさ）に大舉せむと欲（す）に、奄（にわか）に父兄を喪（うしな）う。垂成（完成）之功をして一簣（最後のひとふんばり）を獲ず。居在諒闇（喪に服して）、兵甲は動かせず、是を以て偃息（息を引き取り）し未だ捷（たたか）わず。今に至り甲を練り兵を治めんと欲し、父兄の志を申す。義士・虎賁（猛勇者）、文武に功を效（つく）し、白刃前に交わるも、亦、顧みざる所（死を恐れず）。帝德の覆載（恩恵）を以て、此の強敵を摧（くじ）き、克（よ）く方難を靖（やす）んじ、前功を替えること無きが若（ごと）し。竊（ひそか）に自ら開府儀同三司を假し、其の餘は咸（みな）各（おのおの）假授し、以て忠節を勸めん。」詔して武を使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王に除す。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 年 | 国 | 王 | 王朝 | 帝 | 爵号 |
| 咸安2年（372年） | 百済 | 近肖古王 | 東晋 | 簡文帝 | 鎮東将軍領楽浪太守 |
| 義熙9年（413年） | 高句麗 | 高璉；長寿王 | 東晋 | 安帝 | 使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公 |
| 義熙12年（416年） | 百済 | 映；腆支 | 東晋 | 安帝 | 使持節、督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王 |
| 永初元年（420年） | 高句麗 | 高璉 | 南宋 | 高祖武帝 | 使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句驪王、樂浪公 |
| 永初元年（420年） | 百済 | 映 | 南宋 | 高祖武帝 | 使持節、督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王 |
| 永初元年（420年） | 倭 | 讚 | 南宋 | 高祖武帝 | 讚に除授す可し |
| 永初3年（422年） | 高句麗 | 高璉 | 南宋 | 高祖武帝 | 散騎常侍、督平州諸軍事を加える |
| 景平2年（424年） | 高句麗 | 高璉 | 南宋 | 少帝 | 使持節、散騎常侍、都督營平二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公 |
| 元嘉2年（425年） | 百済 | 映（薨去\*） | 南宋 | 太祖文帝 | 使持節、都督百濟諸軍事、鎮東大將軍、百濟王 |
| 元嘉2年（425年） | 倭 | 讚 | 南宋 | 太祖文帝 | 安東將軍、倭國王 |
| 元嘉 | 倭 | 珍；讚の弟 | 南宋 | 太祖文帝 | 倭隋等十三人を平西、征虜、冠軍、輔國將軍 |
| 元嘉20年（443年） | 倭 | 済 | 南宋 | 太祖文帝 | 安東將軍、倭國王 |
| 元嘉28年（451年） | 倭 | 済 | 南宋 | 太祖文帝 | 使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東將軍、倭國王、二十三人軍、郡に除す |
| 大明元年（457年） | 百済 | 慶；蓋鹵 | 南宋 | 世祖孝武帝 | 十一人を冠軍將軍、征虜將軍、輔國將軍、龍驤將軍、寧朔將軍、建武將軍 |
| 大明6年（462年） | 倭 | 興；済の世子 | 南宋 | 世祖孝武帝 | 安東將軍、倭國王 |
| 大明7年（463年） | 高句麗 | 高璉 | 南宋 | 世祖孝武帝 | 使持節、散騎常侍、督平營二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公に、車騎大將軍、開府儀同三司，持節、常侍、都督、を加える |
| 昇明二年（478年） | 倭 | 武；興の弟 | 南宋 | 順帝 | 使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王 |
| \*三国史記百済本紀では映は420年に薨去、424年の朝貢の記載はない。太祖が百済の使者に映について述べた言葉として当該爵号が記載されている。百済本紀では毗有王三年（429年）に宋に使者を送り、四年（430年）宋が使者を送り、先王の爵号を冊命・授与したとある。将軍序列；大将軍＞驃騎・車騎・衛、諸大将軍＞征東＞鎮東＞安東＞平東＞征虜・冠軍・輔国・龍驤開府儀同三司：開府は役所を設置して役人を配属すること、丞相・大司馬・御史大夫の三公に許され、のちには将軍にも許されるようになった制度。 |

　朝貢者の上表が半島の軍事情勢を正しく反映しているかを判断することは、宋にとっては、そう簡単ではなかった。陸路については北朝により官吏の直接の通行は妨げられており、海路によるか、交易に携わる者が現地で得る情報によろう。現地政権の官吏から聞くこともあれば、嘗て官職を有した漢人が残っており、彼等のネットワークによることもあろう。

　宋は、北朝との対抗上、除授にあたっては、高句麗を最重視する。百済への関心の高さは、近肖古王の時（372年）に、高句麗を討ち、一時的に楽浪から遼西にまで進出していたことが知られていたことによろう。神功皇后49年（249+120＝369年）に倭の将軍荒田別と百済の将軍木羅斤資が新羅を討ち、「比自㶱、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅七国を平定。古奚津に至り、南蛮の忱弥多礼を屠り、百済に賜ふ。・・・比利、辟中、布弥支、半古、四邑降服（2頁）」とあり、倭軍が百済の東部と南部を安定させていた。百済の北への進出を可能にしたと思われる。

　以降に、高句麗広開土王（談徳）により、百済は遼西、楽浪から撤退している。また、高句麗長寿王（高璉）による百済侵攻に対し、宋に支援を求めるものとなるが、宋は、高句麗を重視しており、慎重に対処した。
　倭国に対しては、讚以来「使持節、都督倭百済新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事、安東將軍、倭國王」を求むも、「安東將軍、倭國王」に留めている。宋からすれば、当初は、百済の背後に倭をみていたのであろう。朝貢者により、親魏倭王の倭国と五王の倭国とは別とみていたであろうが、上表と使者への下問により情報を得る他はなく、実態は分からなかったと思われる。大鷦鷯（仁徳）天皇の時に巨大な陵墓が造営され、その国力に関する噂は交易者を通じて知られていたのかもしれない。
　452年の済の時は、日本書紀では雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）の末に当るが半島での活動については記載がなく、435年から452年までは空白となっている。しかし、三国史記新羅本紀、訥祇麻立干（とつぎまりつかん）二十八年（444年）によれば、倭兵が新羅の金城を10日間包囲した（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/22)）、慈悲麻立干（じひまりつかん）二年（459年）には、倭人が百余艘で東辺を襲う、五年（462年）には、活開城を陥れ一千人を連れ帰り、六年には歃良城を攻められ、倭人がしばしば領内に侵入する（[国会図書館](https://dl.ndl.go.jp/pid/1920811/1/23)）とあり、倭王が半島内で軍事行動を起していたことが知られる。宋側も新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓における諸軍事の使持節、都督を倭王に授与してしかるべきとの判断をしており、百済には使持節、都督百濟諸軍事を確保して、配慮をしていた。
　日本書紀に於いて半島の軍事情勢の記述は、大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）七年（463年）までない。任那の日本府における現地で成長した者等が新羅や高句麗と関係を築き、混乱が生じていたことは9～11頁
でみた。八年条では高句麗と親交を結んだ新羅と高句麗の不測の事態からの関係悪化の記事があり、高句麗の侵攻に対する新羅と百済の協力もあった。
　宋は元嘉27年（450年）に、北魏から攻め込まれ、長江を渡る直前に北魏が引き返したのであるが、北魏軍の通過した郡県は荒涼を極めた。孝武帝の代となり孝建二年（455年）に高句麗は長史の董騰を派遣して朝貢し、その国難と復興を慰めている。大明三年（459年）には肅慎氏にも朝貢させ、高句麗は使持節、散騎常侍、督平營二州諸軍事、征東大將軍、高句驪王、樂浪公に、車騎大將軍、開府儀同三司が加えられた。宋からすれば高句麗が北魏に対する牽制になればとのことであろう。
　しかし、高句麗は、北魏を通じて漢化政策や仏教を導入してきており、朝貢を重ねているのであるが、北魏に対する警戒感もあり、宋による爵号の除授はそれなりの効果はあった。北方には柔然、契丹、南方には新羅、百済、そして倭に対峙しており、周辺に対して、宋及び北魏による爵号の除授を得ることは欠かせないものとなっていた。
　宋では同族間での政権抗争による内紛や反乱により衰退し、北魏との戦で実力を蓄えた蕭道成が順帝を擁立し、順帝が禅譲して蕭道成が斉（南朝）を開くこととなった。最後の帝の時の倭王、武が高句麗の朝貢阻止を憤る上表を記録に残している。武を「使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、倭王」に除している。
　この除授の知らせを武が得た時点で、順帝は最早や皇帝ではなかった。そして宋自体が滅びていた。何の効力があろうか？漢や魏が半島に郡県制を敷いて統治するような時代であれば、王朝のお墨付きを得ることは半島に於いて大きな効力を有するが、それが揺らいでしまえば、意味を成さない。武がそう判断し、朝貢を停止したとしても不思議はあるまい。　　　　　　　　　　　　2024.05.29

了